
BLACK D●T

笹舟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L A C K D ● T

【Nコード】

N 9 2 8 7 Y

【作者名】

笹舟

【あらすじ】

『雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生』である主人公。いつものように雨に対して憂鬱を感じていたその日、とあることから『変な名前の』生徒会長と会話をすることに。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」

そう言っただけの彼に手を引かれ、雨の降るなか連れて行かれた先は。

特別なことは何も起こらない、学生生活のちょっとしたお話です。
雨の日の暇つぶしにでもどうぞ。

●と私

BLACK DOT

マンガやドラマで、登場人物が雨に打たれて佇むシーンが出てくると、それがどんなに面白い話でも、途端にマイナスな気持ちが浮かんできてくる。正直「馬鹿じゃないの」とさえ思ってしまう。私がそれらの話に登場するとしたら、戦いに敗れてどれだけ悔しさが募っていくようにも、突然恋人に別れを告げられてどれだけ呆然としていようとも、雨が降り出したらずくに屋根のあるところまで走るだろう。絶対に。

私は雨が嫌いだ。大、をつけてもいい。

雨についてのトラウマがある、なんて事情は無く、ただ純粹に雨を嫌っている。

朝起きた時に窓に雨が当たる音が聞こえてくると、まず軽く怒りが湧く。登校しなくてはいけない平日は特に、だ。そして靴や制服が濡れることを考えて憂鬱になり、ただでさえ低めだと友人から称されているテンションが下がる。

服や靴だけじゃない、雨になると手に持つ鞆だって濡れてしまう。その鞆の中に本が入っている時なんて、最悪の極みだ。考えただけで嫌になる。私は自他共に認める読書家であり、ついでにいうなら学校では図書委員をしている。

大体、心から雨が好きだという人はそうそう居ないと思う。

中学生の時のクラスメイトの中に「私、雨が好きなの」とか言っていた女子が居た。けれどその子だって、帰り際に雨が降り出した時には「うわ……」と顔を歪めていた。その次に口にした言葉は「親に迎えに来てって頼もうかなあ」だ。

それ以来、雨が好きななどと公言している人を見かけると「それってキャラ作りじゃないの？」と心の中で思うようになった。

本当に雨が好きだという人だってそりゃあ居るかもしれないし、その人には私の考えは失礼だろう。でも、あの時にあのクラスメイトが満面の笑みを浮かべたりなんてしていても、それはそれでドン引きしていたと思う。距離的にも精神的にも確実に。

私の中では、雨が好きと言っていいのはゴキブリが好きと言っていいのと同じぐらいだと思っている。極端な例かもしれないけれど、つまりはそれだけ考えが理解し難いということだ。恵みの雨だろうが何だろうが、嫌いなものは嫌いなのである。

ここまで宣言してきた通り、私は雨がとても嫌い。

それだというのに、私の地元では雨がよく降る。

だから私は、私の地元も嫌っている。見事な三段論法だ。

雨と地元を嫌っている、テンション低めの女子高生。

そんな私が、『雨が降る地元の商店街で』、という、あまり芳しくないシチュエーションで出会った店がある。出会ったというか、出会わされたというか、出会わせてもらったというかはとても微妙な境だけど。……それに何の因果だろうか、その店と出会うきっかけをつくった人物は、名前に『雨』という字を冠している人だったりもする。

——さて。

これは、その人とその店に出会ってからの私の話である。

雨と地元を嫌っているテンション低めの女子高生、つまり笠見颯子である私の話。

その私が、それからどうなったか。どうもならなかったのか。月並みで三流、ありがちな言い回しだけど、

——それは読んでのお楽しみ、

אשר יאמר

波打つ表紙とアマガエル

今日で雨へのマイナスイメージが更に上がった。

「最悪だ……」

私は鞆に入れていたタオルを取り出して、本を包んだ。

——今日は朝から曇り空だった。

午前中の降水確率は八〇パーセント。傘はこのあいだ壊れたばかり。今週から新しい靴を履き始めている。シャーペンの芯がもうすぐ無くなるけど、それを除けば今月欲しいものは特に発売されないので、財布の中には余裕がある。

普段は徒歩で学校に向かっている私は、今日はバスに乗ろうと決めた。

バスに乗ると決めたら、家を出るまでの時間に開きが出来た。その間に、先日母さんが買ってきてくれた本を少し読む。第一章がもうすぐで終わるといふ微妙なところで時間になったため、続きはバスの中で読もうと手に取ったままバス停に向かった。

私と同じような考えをしたらしい、バス停には何人かの制服姿が並んでいた。この辺りの住宅地には同じ学校に通う学生が多く住んでいる。

やがてやってきたバスに乗り込み、中央から前よりの席を確保、腰を下ろした丁度その時にバスの窓に雨粒が弾けた。それを皮切りに弱めの雨が降り始める。

家を出る時はまだ降ってきていなかったせいで傘を持ってくるのを失念していたことに気付き、しかしそもそも愛用の傘は踏んで壊してしまっただったということに思い至る。うんざりとしながら、バス停から学校までの一〇〇メートルは走るしかないかと仕

方なく覚悟を決めた。

それからは、持っていた本へとすっかり意識を移して、その内容にのめり込んでいった。商店街の真ん中を走っている時に一度顔を上げた以外は、延々を活字に眼を通して過ごす。

停まる度に学生の増えていったバスが、学校に一番近いバス停（名前もそのまま北第一高校前である）に到着した時には、雨は小雨と呼べる程度にまで弱まっていた。

バスが止まると同時に学生が一斉に立ち上がる。手のひらに準備していた小銭を運賃箱に落として、バスから吐き出されていく。その列の中に揉まれるようにして私も降りた。

私がバスを降りて数歩歩いたとき、いきなり雨足が強くなってきた。

ほんの一〇〇メートルくらい、しっかり抱えていれば大丈夫だろうとタカをくくって、私は手に本を持ったままだった。しかし激しくなってきた雨粒にこれは危険だと判断を変えた。

慌てて本を鞆の中に入れようと道の脇に立ち止まって、

ステップから降りる勢いのまま駆け出した学生とぶつかり、

——私は本を取り落とした。

思わず私は小さく叫んでしまった。「あ、悪い」と一言残して去っていった男子学生に眼は向けず、すぐに本を拾い上げる。指に伝わるふやけたような感触に、頭の奥が重くなる。

数秒だけ鞆に入れるか迷い、それよりもこれ以上雨に打たれないように、とぶつかった男子学生の後を追うように学校に向けて走り出した。走り出した頃には怒りが湧き上がっていたから、その学生が私の方をちらりとでも振り返っていたら、後ろを走る私の表情を見て「殺される!」とでも思っていたかもしれない。

急に立ち止まった私に非が無いとは言わないけど、でも、嗚呼……。

そして今に至り、怒りは哀しみに変化していた。

この時間になると、大体の生徒は登校し終えている。生徒玄関には、本の水気を吸い取ろうとその落とした本を包んだタオルにぎゅうつと力を込めている私の姿しかない。

「ああもう……。ほんとに……。最悪だ……」

ため息をついて、タオルを開いてみる。表紙はすっかり波打っていた。布製の文庫カバーでもしていれば良かったのだが、この本には紙のカバーさえかけていない。

母さんは本を買うときにカバーを断るタイプの人で、母さんが買ってきてくれたこの本もそれに違わない。曰く、「下手な店員がするぐらいなら、むしろ、してもらわない方がいい」らしい。それには私も賛成で、ただし「むしろ」の続きには「自分でする」がつく。だから書店でかけてもらわずにカバーを貰って自分でかけているけど、残念なことに母さんはカバーをすることにこだわってはおらず、わざわざカバーを貰いはしない。

ふやふやになった表面を撫でて、その凹凸に悲しくなる。

何度目かの、最悪だ、を口にしようとした時、

「ああーもおー、そこそこ悪だーっ」

妙なことを叫びながら、アマガエルが飛び込んできた。

——いや、その雨合羽の色合いが見事にアマガエル色だったために、二秒くらいは本気でそう思ったけど、そのアマガエルは、入学してまだ二ヶ月しか経っていない私でも名前を知っている男子学生の姿だった。

理由は二つ、その男子学生は『変な名前』の『生徒会長』だからである。

「生徒会長、

」

この北第一高校、通称「北一」は、東高校と県で三番目争いを展開中の進学校だ。

ちなみにもう一つの北高校である北第二高校は、卒業後に就職を考えている生徒が半数を占める総合学科となっている。

しかし、県で三番目（or 四番目）の進学校と言えど、北一はガリ勉が集まったテスト三昧の学びの舎、ではない。私がここに入學したのも、進学を考えてではなかった。

登校にわざわざ駅を超えるのが面倒だったこと、徒歩数十分の場合にここがあったこと、中学三年の時に担任から「北一はどうだ？」と提案されたこと、少々頑張ってみれば学力も何とかなりそうだったこと、学校説明に来た校長先生が良さそうな人だったこと、制服がそれなりに悪くなかったことが重なり、他の高校と並べて考えた末に、私は北一を選んだのだ。

ただしその「勉強漬けではない」というのは、今の私が北一に入らたての新生だから、そう感じているだけなのかもしれない。そこで話はちよつとだけ軸に戻る。

北一の生徒会長は、大体は二年生が務める。

三年になったら勉強の日々、というのは、北一の一年・二年の生徒だけでなく、北一の教員もがよく口にする文句である。

北一では、三年生に進級すると、進学に向けての準備として委員会からも生徒会からも退会するのが、通例になっている（らしい）のだ。部活動は夏にあるそれぞれの大会が終わるまでは所属している（らしい）けど、生徒会長などの役も本人が希望しない限りそこで代替わりをする（らしい）。そして「今までそうだったから、なんとなく」というもの（らしい）とはいえ、通例をわざわざ破っ

てまで役を続けたいという生徒は少ない（らしい）。

すべて、伝え聞いた話によると、である。

これから二年先のことに、私はまだそこまで興味も実感も沸いていない。

で、ようやく本筋に戻るとするとこのアマガエル。――失敬、生徒会長。

彼は北一の二年生で、苗字は中谷といい、名前は雨に里と書いて『うり』と読む。その変わった名前を、新入生のほとんどは入学式から忘れたことが無いだろう。

入学式の歓迎の挨拶の時、彼の名前は呼ばれた。

いつも眠たげな顔をしている教頭の「生徒会長、中谷雨里」という声がマイクを通して体育館に響いた途端、ステージの前に並んだ新入生たちと、後ろの方でパイプ椅子に座っている保護者たちの間には、

「うり？」 「名前なの？」 「うりって言った？」 「読み間違い？」

と、ちよつとした動揺と驚きの声がささめいた。

そんな中、壇上でスタンドマイクの高さを調整し終えた彼は、開口一番、

「変な名前だよね。でも、おかげで覚えてもらえやすいかな」

そう言っ、私たち新入生にニツと笑いかけた。

その後はポケットから紙を取り出して「新入生の皆さん。ご入学、おめでとうございます」と、その紙に書かれているのであろう、よくある言葉が並んだ文章を読み上げ始めたものの、第一声に新入生を歓迎する「ようこそ」でも、新入生を祝う「おめでとう」でもない言葉を向けられるとは思わなかった。

しかもそれが自分の名前を貶す言葉とは。

まあ本人の言うとおり、おかげで入学一日目にして、その名前は
ばっちりと私の記憶に刻み込まれたし、クラスメイトたちも、

「すごい名前だね」

「っていうか、ふつう自分で言う？」

と、インパクトを受けたようだった。

フレンドリーなお隣さん

回想から思考を現在へと戻すと、中谷会長は雨合羽を脱ぎ始めていた。

その姿がアマガエルから学生へと変わっていくのを見ると、脱皮という言葉が浮かんだ。カエルは脱皮をしないけど。それくらいは知っているけど。

「あつれ。一年生？」

——気付かれた。

脱いだ雨合羽をばっさばっさと勢いよく振り、玄関の外に水滴を飛ばしながら中谷会長が私に尋ねる。露骨に眺め過ぎていたんだろうか。

私は頷いて答えた。

「一年です」

「もしかして、ロッカーの場所、わかんない？」

「あ、いえ」

北一では、生徒一人につき一つの縦長ロッカーが与えられている。更衣室などでよく見られる、無骨なスチールのよくあるアレだ。

生徒はその個人ロッカーに付属のスチール盤を掛け渡して棚状にし、体操服を入れておく、教科書をそこに納める、などと三年間活用する。鍵もついているため、登校中に聴いているMDプレイヤーなどの貴重品を管理しておくのにも便利だ。

しかし、ロッカールームには全校生徒分の同じロッカーがずらりと並んでいる上に、ネームプレートは付いていない。一年生のロッカーだけはクラスと出席番号の書かれたシールが貼ってあるものの、慣れるまでは探すのに一苦労だった。

「大丈夫です」

そう、一苦勞、だった。

入学して二ヶ月経ち、ロッカーに教科書も体操服も保管しているのが常となった今では、さすがにロッカーの位置くらい把握している。一苦勞、は既に過去形なのだ。

心の中ではそう思いつつも、それでも一応は「お氣遣いありがとうございます」
「うございます」というつもりで、首を前に出す程度に頭を下げた。

中谷会長は雨合羽を振るのを止め、シューズを脱ぎ片手に持つと「だよねえ」と笑った。

「二ヶ月も経てば慣れるよねえ」

——だったら訊くな。

置いていたスポーツバックを肩にかけると、中谷会長は二年の靴箱が並ぶ方へと足を進めていった。分からないと言ったら連れて行ってくれたのか、と何処か釈然としない気持ちを抱えつつ、ローファーを上履きに履き替えた私もロッカールームに向かう。今日の授業で使う教科書を二階の教室まで持って上がらなければならない。

ロッカーの鍵を開けながら、もう一度本を撫でてみた。

それはもう乾いていたけど、濡れた表紙はやっぱり波打ったままだった。

長編の物語を文庫にしたものだから、ページは厚めで、値段もそれに比例して高めで、ずっと読みたいと思っていたけど手が出しにくくて、それを察した母さんが先日買ってきてくれた本だ。まだ、読み始めたばかりなのに。

「……やっぱり最悪だ……」

諦めきれない思いを口に出した瞬間、

「勿体無くない？」

今まで視界に無かった鮮やかな色がぬっと現れて、思わず仰け反った。

「最悪って、『最も悪い』だよ。『悪い』の中での、『最も』。一

番悪いんだよ。ショックの原因が何なのかは知らないけどさ、今『最も悪い』って表現を使っちゃう？」

ああ。アマガエル色だ、これ。

「人生は結構長いよ、たぶん」

変な名前の中谷会長は自分で頷きながら笑った。――自分の考えを懸命に説明してくれたんだろうけど、そうですか、としか私には思えない。

驚いたことに、私と中谷会長のロッカーは隣同士だったらしい。

私のロッカーが一年列の折り返しの場所であり、右隣からは二年専用のロッカーだということは知っていた。だけど誰の物なのかは今まで知らなかったし、興味も無かったから知ろうともしていなかった。……でも今日のために知っておくべきだったのかもしれない。アマガエルの出現で驚いてから、未だに私の動悸は治まってない。

雨合羽を抱えた中谷会長は「隣？」と私のロッカーを見て一度眉を上げ、自分のロッカーの鍵穴に鍵を差し込んだ。その鍵についていたストラップもカエルだった。

「あ、でもさ、英語の例文で『第九は音楽界で最も有名な曲の一つだ』とかってあるよね。最もって、いくつもあってもいいってことかな。どうなんだろう」

生徒会長は思い出したようにそう言いながら、開いたロッカーからはプラスチックのハンガーを取り出した。そのハンガーに雨合羽をかけると、教科書類を出すことなく、またロッカーに鍵を閉める。そして「ね？」とこちらに視線を向けた。

いや、そんなの私に訊かれても。

そう思いながらも、当たり障り無く、気になるところですれどだけ返して私は自分の教科書を取り出した。すぐにロッカーを閉める。

「じゃあね、授業頑張って」

「……どうも」

別れ際までフレンドリーな人だ。きっとたくさんの友達が居るんだろう。

でも、私にとってこういう人は、正直対応に困る相手だ。

学年が違えば、あまり顔を合わせることもない。一言の会話もしないまま、どちらかが卒業することだってある。例えば部活動などの関わりあう機会が無ければ、「先輩」と「後輩」の関係ってそんなものじゃないだろうか。

そして私は、今日まで中谷会長と話したこともなかった。それなのに、朝、玄関で顔を合わせただけの後輩にあれだけ親しく接するとは。

この学校の生徒会長は、名前だけでなく、性格もちよつと変なのかもしれない。

そんなことを考えながら、ロッカールームを離れて足早に廊下を歩いた。

一応断っておくけど、別に中谷会長から逃げようと思ったんじゃない。

とろとろしているとホームルームに間に合いそうになかったからだ。

朝の人と変な人の帰り道

「……あ、」

記憶を巻き戻してみれば。

登校のバスで一度だけ顔を上げた時、商店街の歩道にあのアマガエル色を見た気がする。

そんなことを思ったのは、三時間目の生物の授業中で、

「ここ重要だからね、まずはここから押さえていこう！」

担当の教員が大きくカエルの図をホワイトボードに描いた時だった。

そのカエルの発生をマスターしたところで、私はいったい将来何に使えるのだろうか。

窓の外、勢いは弱くとも未だ降り続けている雨に、意識せずとも溜息が出た。

＊

私の怨みが届いたのか、嬉しいことに昼過ぎには雨が止み、放課後には曇り空から晴れ間が見えた。

これなら歩いて帰れそうだ。私は早々と支度を終わると、すぐに教室を出た。

「颯子、真っ直ぐ帰るの？ 今日は何書室行かないんだ」

「降らないうちに帰る。部活頑張って」

廊下ですれ違った友人に手を振って、私は階段を降りる。

進学校である北一は、部活動は強制ではない。

入学前は何部に入ろうかと本気で悩んでいた。毎日放課後に練習

するほど好きな運動も無いし、だからといって文化部の中に興味をそえられるものも無かった。しかし、入学して程なくそのことを知り、「あ、いいんだ」と拍子抜けした私は、悩むのをすっぱり止めた。

つまり、部活動には入らないことにしたのだ。

だから私の放課後といえば、部室棟に向かう友達に手を振りながら図書室に向かうか、グラウンドを走る運動部を眺めながら帰路につくか、という悠々としたものである。

だけど、今日は少し勝手が違った。

「あ、朝の人だ」

『朝の人』ってどうなの。ハムの人みたいな。

教科書を抱えてロッカーに向かうと、中谷会長が雨合羽を取り出しているところだった。どうもと朝と同じように頭を下げ、その隣に並んで、鍵を開ける。

「最悪だーって言ってた、朝のショックは消えた？」

「……………」

——忘れてた。

ぶり返してきた悲しみと怒りが、それを思い出させた中谷会長に自然と向かう。

軽く睨みつけるようにして生徒会長に目線を向けると、それに気付いていない様子の彼は、弱ったような顔をしてむくれていた。人の眉が本当に八の字になると、初めて見た。

「俺も今日ちょっとツイてないことがあって。朝からテンション下がるよねー」

そういえば、と思う。

玄関に飛び込んできた中谷会長は、「そこそこ悪だ」という謎の言葉を発していた。そして中谷会長は今、朝から不運な目にあった

と言っている。

今朝、彼は「最悪だ」と使うのが勿体無いから「そこそこ悪だ」と言ったのだろうか。

ああ。――……変な人だ。

靴を履き替えて玄関を出たのが、またもや丁度、中谷会長と同じだった。

「よく会うねえ」

「……そうですね」

今日は朝から中谷会長づくしだ。中谷会長大放出の、中谷会長デラしい。嬉しくない。

帰り道まで同じ向きらしく、私と中谷会長は商店街へ続く道を歩く。

私と中谷会長の歩調も似たようなもので、いきなり早く歩くのも何だかだし、速度を落とすのも何だかだしで、成り行きのまま、二歩ほど離れた微妙な距離をあけて私は中谷会長の後ろを歩いた。

この地域は、商店街が多い。

中でも、鷹据駅を中央として大体で言えば四方に伸びている商店街は大きなもので、この辺りでは大路と呼ばれている。

元々の名前は「駅北商店街」「駅東商店街」「駅南商店街」「駅西商店街」というそのままの名前だが、住人には「北大路」「東大路」「南大路」「西大路」という呼び名の方が一般的である。呼び名のように特に大きな通りという訳ではないが。

そしてこれは地元住人である私には不思議なのだが、何故か、電車で北一に通っている鷹据外の学生の方が、商店街を「大路」と呼ぶことにこだわっている。大阪にやって来た田舎者が関西弁を喋りたくなるような心境だろうか。

……ちよつと違うか。

私が登校時、そして下校時に通るのは、その中の北大路だ。

左右には飲食店やスポーツショップといった店が軒を連ねているけど、あまり注意して見たことは無い。登校時も下校時も、歩くことに専念しているからだ。

それに、この辺りで大きな商店街の一つとは言っても、私が北大路で買い物をする時といえば、気が向いた日の帰り道に、次の日のおやつ用のパンを小さなスーパーで買うくらいだ。東・西・南でもそれは同じで、行くことが多いといえるのは東大路の入口（駅に近い方として考える）付近にある、三階建ての本屋が唯一である。

まだシャッター街とまでは行かないけど、大路に陰りが見えてきているのは確かだ。

私はそれが寂しいような、でもそれも当然なような気持ちで受け止めている。だって私にはこの大路への思い入れなんて、そんなに無いのだ。

向かう先は

「あ」

短く声を上げ、すぐ前に行く中谷会長が足を止めた。

思わず私も足を止めてしまう。

振り返った中谷会長は私の顔を見て、何か言いたげな顔をしながら考え込み始めた。

ちよつとだけ無視していこうかとも思った。でも、中谷会長が私から眼を離さないのもそれも実行しづらい雰囲気だ。

ようやく何かを決めたらしい中谷会長が、口を開いた。

「……えーと、朝の人、さん」

名前が分からないなら正直に訊け。

「笠見颯子です」

「あ、ごめん。笠見さん」

軽く頬を掻き、その返しに自分も名乗ろうとした彼に、中谷生徒会長ですよねと先を越してやった。私が名前を知っていたことに、中谷会長はちよつと嬉しそうな顔になって、そうそうと頷いた。

自分から「変な名前だから覚えられる」って言ったでしょう、約二ヶ月前に。

「笠見さん、傘持ってきてる？ 折りたたみでも」

「持ってきてないです」

「降るよ、これ」

これ？ どれ？ いきなり何だ？

主語無しで断言した中谷会長の表情は、

「雨……ですか？」

「うん。家は、もう近い？」

「あと十五分くらい歩きます」

「あー、じゃ困ったね。あと三分くらいで降ってくるよ、雨」

「……困りますね（あなたへの対応に）」

それでも迷いの無いものだった。

「家までに十五分かかるなら、確実にその道中で降り出しちゃうね」
「じゃあ早く帰らないと」

中谷会長の言葉を鵜呑みにした訳ではない。

だけど本当に雨が降るというのなら、今のうちに帰りたい。こんなところで立ち止まっていけないで、早く歩みを進めたい。

だからそこを退けてください、とそんな気持ちを込めて中谷会長を見据える。あなたが私の目の前に立ちはだかっているせいで、進もうにも進めないんです。

でも、眼と眼で通じ合うー♪、なんて無理な話だった。

「よし。笠見さん、雨宿りして行こう」

相手はフレンドリー過ぎる生徒会長。彼は想像以上の強者だった。

「あまやどり……」

「うん、すぐそこにぴったりのトコがある。丁度、今日寄る予定だったし」

意味の分からない、いや、意味は分かるけどそれが今の流れで登場する理由の分からない単語を呆然と繰り返す。雨宿りに私を誘う

理由が何処にあるというのだ。

私は降らないうちに家に帰りたい。用事があるなら一人で行ってください。

だけど対する中谷会長はとても上機嫌で、当然ながら私の、帰りたいという意思なんて届いていないに違いなかった。

とはいえ、私にだって断る権利はあるはずだ。

「……すいません、私」

「あつれ、三分保たなかったねえ」

ぽつつ、ぽつぽつ。ざーざー。

中谷会長が空を見上げた瞬間に、一体どんな仕組みなのか、と疑いたくなるようなタイミングで強い雨が降り始めた。思わず呆気にとられる私をよそに、中谷会長はごく自然に私の手を引いて商店街の歩道を小走りで進む。

「あ、大丈夫だよ。生徒会長の名にかけて、不純異性交遊なんてしないから」

ため息が出た。

あなたのその生徒会長という肩書きに、どのくらいの重みがあるというの。

向かっている理由は

私は社交的な性格ではない。

というか、事なかれ主義だ。だから友人は別として、自分から人に関わっていくようなことはあまりやりたくない。朝感じたとおり、先輩で、今まで話す機会も無くて、何の接点も無かった相手、私の真逆であるフレンドリーな中谷会長に対応するのには、困る。

それでも私が中谷会長に大人しくついていったのは、諦めがあったからだ。

結局、帰るまでに雨が降ってきてしまったし、この強雨の中を傘無しで歩く気にはならないし、中谷会長の気が済むならいいか。と。

そもそも全ての物事にバタフライ効果が働いているというのなら、

今こうして雨宿りに向かっているのは、帰り際に中谷会長に声をかけられたからで。

帰り際に中谷会長に声をかけられたのは、朝出会っていたからで。朝出会ったのは、私が本を乾かしていたからで。

本を乾かしていたのは、バス内で読んでいた本を落としたからで。バス内で本を読んでいたのは、家を出るまでそれを読んでいたからで。

家を出るまでそれを読んでいたのは、時間があつたからで。時間があつたのは、バスに乗ることを決めたからで。

バスに乗ることを決めたのは、雨が降る道を歩きたくなかったからで。

雨が降る道を歩きたくなかったのは、私が雨を嫌っているからで。

現在のこの状況の起因、それは私の雨嫌い。

もうこれは私の本能と呼べるものとまでになっている。諦めるしかない。

この『雨宿り』の先が、良い方、悪い方、どう連なっていくのかわからない。だけど何故か漠然と、中谷会長との繋がりはこの先も切れることが無い気が、既にこの時からしていた。

その時には、とっても、嬉しくなかった。

向かった先は

北大路の横道を曲がり、少し歩いた。

こんな店があつたんだ、と思った時には、もう中谷会長は店内に足を踏み入れている。

入り口付近に並べてあるものが気にはなるけれど、入って一番始めに思った感覚で言えば、ここは小さな喫茶店のような店だった。店員の姿のあるカウンターと、客用だろう三つの丸テーブルがある。奥には階段も見えていた。

「ヨウちゃん居る？ あのだジッパー、また壊れちゃったんだよねえ」
ようやく私の手を離れた中谷会長は、親しげな口調でそう言うように肩から下げるスポーツバッグを漁りだした。ずるずると中から引き出してきたのは、あの雨合羽だ。

「中谷なら居ないぞ。お前の好きな芳香剤を受け取りに行った」
カウンターの奥で本を読んでいたらしい店員が立ち上がって答えた。

その店員を見た瞬間に私の頭に思い浮かんだのは、あの日本アニメの巨匠の作品に出てくる黒くて丸い煤の塊のキャラクター（金平糖好きな設定だった気がする）、だった。ただし、そのキャラクターに描かれる大きな眼だけは違う。

この店員の眼は、とてもボリウムのある黒髪で隠れ、ほとんど見えていなかった。その眼には銀のフレームが光る眼鏡をかけているから、視力が悪いのかもしれない。――それは髪型のせいなんじゃないだろうか。

中谷会長は「月雨シリーズ出んの？」とうきうきした様子でカウンターに近づいていった。どうするべきか分からないまま、私もとりあえずその後をついていく。

その私に、タオルを差し出した店員が気付いた。ほう、という声が感慨深げだった。

「三十分、いや、二十分くらい雨宿りさせて」

受け取ったタオルでがしがしと頭を拭く中谷会長に、店員は大きく頷いた。

「もちろん。それよりも雨里。俺は、お前は色恋に興味が無いものだと思ってたよ」

「ん？ あ、紹介する？」

「ああ、ぜひ頼む」

……何だか絶対に誤解されてる。

私は中谷会長が口を開く前に、店員に名乗った。

「笠見颯子です。一年で、中谷会長の後輩です」

私の声色に、店員は何となく悟ったらしい。苦笑しながらよろしくと頷いた。

すぐに私にもタオルを差し出してくれたので、ありがたく鞆を拭き始める。立ったままそうしていると、カウンターの席を勧められた。私は近くの椅子に腰を下ろす。

私の隣に座った中谷会長が、今度は私に店員を紹介する。

「この人は古場圭太さん。ヨウちゃんと一緒にこの店をやってる人。今は妙にもっさもっさしてるけど、ほんとに清潔で爽やかなお兄さんだから」

清潔で爽やか。――へえ。

私の視線に、その古場さんが再び苦笑した。自分の髪を一房つまんで、「湿気に弱くてね」と困ったように肩をすくめる。

「で、何にするんだ？」

古場さんがぞんざいな口調で中谷会長に尋ねる。その後で、「笠見さんも、何がいい？」と、何かメニューのようなものを渡しながら、私に柔らかく尋ねた。

「あ、酷い、男女差別だ」

「笠見さんはお客さんだろう。区別して当然だ。それで、何にするか決めたのか」

「あーちよつと待って。ちなみに今日のお茶請けは？」

「紅月さんの『月むすび』」

「じゃあ、ほうじ茶で。薄めね、薄め」

短く「はいよ」と答えた古場さんが、「決めた？」と私に向き直る。

……いや、「決めた？」と言われても――。

困惑している私を見て、古場さんが気付いてくれた。「月むすびー♪」と喜んでいる中谷会長に、お前……と呆れたような声を出す。

「何の説明もせずに、ここまで連れ込んだんだな？」

「連れ込んだなんて語弊を招くからヤメてよ。招待したの、俺は」

「で、説明はしてないんだな」

「せつめい？」

心底きよとした顔をする中谷会長に、古場さんはわさわさと髪を揺らして首を振る。

「やっぱり、お前に色恋ごとはまだまだ無理だ」

中谷会長の恋人となった人は、気苦労が絶えないだろうな。

『雨宿りサービス』、と書かれた値段の無いメニューを手に、私は心の中と思う。

『BLACK DOT』

雨天時に『BLACK DOT』を訪れた人には、飲み物一杯のサービスを。

『BLACK DOT』というのがこの店の名前で、そのサービスの名前が『雨宿りサービス』だった。常連なせいでそれが当たり前過ぎて、中谷会長が私に対しての説明をすっかり忘れていたのがこのサービスだ。

「それと、日によって違うお茶請けが準備してあるんだ。これは、この大路や、ほか三つの大路にあるお店の多いな」

今日のお茶請けである『月むすび』を二人分カウンターの奥から差し出しながら、「別料金でのメニューもあるけど」と古場さんが付け加えた。

『月むすび』。薄い黄色をした真ん丸のお饅頭。北大路にある和菓子屋、『紅月』の一品だ。今までに食べたことはあるけど、それが何年前のいつのことかは覚えていない。

懐かしさが込み上げてきて、私は古場さんに向けて笑った。

「すごく久しぶりです、これ食べるの」

「宣伝料ってことで、定価より、ちょっと安く買わせてもらってるんだ」

古場さんも『月むすび』を指差して、にやっと笑った。

「ご近所付き合いの賜物を私は頂いているわけだ。こう思うのはちよつと癪だけど、雨のおかげで、無料で。」

『月むすび』に齧りつき、その懐かしい味に眼を細める。

口を動かしているとふと視線を感じた。隣を見ると、既に自分の

分を食べ終え、ほうじ茶を啜っていた中谷会長が私の顔を見て満足げにしている。

「美味し？」

「美味しいです」

「それは良かった」

うん。良かった。

この美味しさを久しぶりに堪能出来たのは中谷会長のおかげでもあるのだと思いとすると、私の中に浮かぶ中谷会長への苦手意識が、少し和らいできた。我ながら簡単なやつだと思う。

「どうして、このサービスを始めたんですか」

『月むすび』を食べ終えて、自分の分のほうじ茶を飲む。ふと思ったことを口にする、カウンターの向こう側の古場さんが少し考えるように斜め上を見上げた。

「この商店街を歩いている時、急に雨が降ってきたら一番困るのは何かって考えて、俺らは雨宿りする場所じゃないかって思った。気軽に足を入れられる場所があったらいいんじゃないかってな。喫茶店に行くのは勿体無いと思う人も、無料で飲み物を提供するお店だったら、ちょっと入ってみる気にならないか？」

なる。少なくとも『得』という言葉が好きな私は、絶対に。

「とってもいい考えだと思います」

古場さんの答えに納得して頷きかけ……しかし疑問が浮かんで眉を寄せる。

『喫茶店』に行くのは勿体無い。

ということは。

「……『BLACK D●T』って何屋さんなんですか？」

私はそうだと思っていたけど、ここは喫茶店ではないということ？

「何屋……。何屋っていうんだろうな」

古場さんが腕を組む。私はぐるりと店内を見回す。

カウンター、丸型のテーブル。

テレビ、CDコンポ、本棚。

スプレー型のものが並んだショーケース。

入り口付近の、雨合羽や傘がたくさん掛かったラック。

その下に並ぶ、色とりどりの長靴。

壁には何枚もの写真が貼られていて、その写真は雨の日のものが多かった。

「んー、『雨の日専門店』、とかじゃない？」

小首を傾げるようにした中谷会長がそう言ったのと同時、今まで洋楽だった店内のBGMが、私もよく知っている童謡へと変わった。

♪ あめ あめ ふれ ふれ かあさんがー……

雨嫌いによる印象と感想

二十分程度の雨宿りをしていると、雨はかなり小雨になっていた。

「今日は天候がころころ変わったよね。流石この地って感じだよ」
「そうだな。しかし相変わらず、雨里の予報はよく当たるもんだな」
「まーね。自分的的中率は八十四パーセントってとこさー」

ガラス張りの入り口から外を見て呟いた古場さんに、一枚の写真の前に立っていた中谷会長はそっちに向き直って胸を張った。

『BLACK DOT』が雨の日専門店ということを知りながら、私は中谷会長に店と商品を紹介してもらった。

内側に青空の描かれた傘や、一見するとコートに見えるおしゃれな雨合羽。こだわったデザインの長靴は各種のサイズが取り揃えてあったし、使用する素材によって違う防水スプレーはセット売りもしてあった。

案内してもらった二階には、下で売っているような傘や長靴だけでなく、カエルや雫の雑貨もあったりして、それらの全てが、少なくとも私の眼から見てセンスがいいと思えるものだった。中谷会長の言っていた「月雨シリーズ」というのは、「四月の雨」「五月の雨」「六月の雨」というカード型の芳香剤のことで、それも二階に販売してあった。

店内に流れているBGMは、雨に関係する曲を集めて編集したものだった。この作業は、今は外出中で、もう一人の店員である中谷陽介さんという人がしたらしい。中谷会長が陽ちゃんと呼ぶその人は、中谷会長の従兄だそうだ。

そして、写真。

壁に貼られている写真は、カメラが趣味の古場さんが撮ったものだ。

「俺が一番これが好き」

中谷会長がそう指し示したのは、想像通りと言うべきか、カエルが写ったものだった。でも確かに、狒犬の上でそれと同じ格好をしたアマガエルの写真は、私が見てもお世辞抜きでいいなと思った。

雨嫌いの私から見ての、雨の日専門店・『BLACK D●T』。

率直に言えばこの店は楽しかった。私は好きだ。

……お茶請けも、美味しかったし。

雨嫌いによる印象と感想（後書き）

一話ずつの話の長さがばらばらですみません。
今更ですが、すみません。

アイテム…傘、購入

「この雨、しばらくは強くならないみたいだねえ」

入り口まで近づいて空を見上げていた中谷会長が振り返る。湯のみを片付けていた古場さんが、帰るのか、と顔を上げた。

「止むかどうかまでは微妙だしね。んー、笠見さん、いい？」

中谷会長の確認に、私は頷く。このくらいの雨なら、雨嫌いな私でもまだ許せる範囲だ。

「あ、傘貸して。合羽は置いてくから」

「売り物からは取るなよ」

「取りませーん。俺と笠見さんの分、二本ね」

階段を上がっていこうとした中谷会長に、私は慌てて言う。

「いいです、私の分は。これ、買いますから」

商品を見ている間に考えていたことだ。

朝バスに乘ろうと決めた時に思い浮かべた通り、私の傘は壊れたばかりで、今月は特に欲しいものは無い。そのおかげで、財布に余裕はある。

それに丁度気に入ったものを見つけた。紺色で、円状に並んだ六つの雫が花を描いている傘だ。ふちに白い線も入っていて、私好みの、可愛すぎないおしゃれなものだ。

私がラックから取った傘を見て、古場さんがカウンターから出てきた。

「気に入って、買ってくれようとしてる？」

苦笑交じりの言葉が、買うのが礼儀だと思ってないか、と聞こえ

た。

私は少しだけむっとして、そうですよと答えた。形式の礼儀のためだけに、この私がお金を支払うものか。そんなことするぐらいなら本を買うために取っておく。

古場さんはやはり人の気持ちを察するのが上手くて、

「そうか。ならいいんだ」

私の心の中を理解したように何度か頷いてから、苦笑してごめんと頭を下げた。

「あ、じゃあさー」

何かを思いついたらしい中谷会長が、ニッと笑って手を伸ばし、私から傘を取った。

「これ、俺に売ってよ、圭太さん。で、笠見さんが俺に代金払って？」

——中谷会長を経由する意味が分からない。

私は眉を寄せたけど、古場さんは合点が言ったらしい。

「ああ、……成程な、いい手だ」

「でっしょ？」

笑いあう二人に入り込めず、私はただ首を傾げる。……だけど、

「じゃあ、店員割引で三割引いて——」

その古場さんの言葉で私も納得した。

確かにお得な、いい手である。

「ただの」(前書き)

今回いつにもまして短いです。

「ただの」

定価の七割の代金を中谷会長に手渡しながら、私は尋ねる。

「バイトしてるんですね、中谷会長。『BLACK DOT』で休日だけ。部活動には入ってないしね」

「生徒会って忙しいんじゃないですか？　ましてや、会長なのに」

「周りが優秀だから、俺はそれほどでもないかなー。中でも特に副会長は真面目によく働いてくれるからね、大助かりだよ」

というか。

「禁止されてはないけど、アルバイトって認証状が要りますよね」

——持ってるんですか？

言葉に出さない私の追求に、中谷会長は指を一本たて、それを左右に振ってみせた。

「……笠見さん。俺のやってることはね、」

その答えは、ズルいけど、これもいい手だった。

「親戚のお兄さんのお手伝いです。だから、アルバイトじゃないんだよ」

「…………。生徒会長なのに」

やられた感が少し悔しくて、聞こえよがしに呟いてやる。

中谷会長があっさり返してくるだろうというのは、薄々と分かっていたんだけど。

「生徒会は、生徒の模範じゃない。ただの代表だよ」

嘯く中谷会長は、笑顔だった。

「ただの」(後書き)

次回で一部終わります。

帰り道中にて

『BLACK D●T』を後にして、雨音さえしない静かな雨の中を歩く。

いい店との出会いのおかげか、新しい傘のおかげか、雨という天氣にしているのは珍しく、私の心は穏やかだった。普段なら、お腹の底にずんぐりとしたものが居座っているような気持ちになるのに。

「家はどの辺り？」

「市営プールを少し越して、その橋を渡れば、すぐです」

「プールって、あの夏季救命講習で使ったやつ？ ……って笠見さん一年だった。まだ習ってないじゃんね。先に言っておくけど、あれ、本っ当ーに面倒臭いよ」

大切な講習なんだろうけどさと眉を寄せる中谷会長に、思わず笑った。

「その講習って、服着たままプールに落ちるやつですか」

「そうそう、それ。見てたの？」

「小学校の時にやりました。私は、それなりに楽しかったですけど」

「うん、落ちるのはね。楽しかった」

中谷会長が語るには、その講習は一年から三年、三学年ともが同じ時間帯に実施されたらしい。

しかしプールにその三学年が一気に入るわけにはいかない。そのため、一年は市営プールまで徒歩で行った。ちなみに二・三年は一年の時に全員が受けているからということ、代表者だけがプールに入っただとか。

「夏休み前の暑い中だよ。うだうだ歩いて、プールについて、講習。終わったらまた、うだうだ帰る。一年全員の長蛇の列がこの大路をうだうだうだうだ。講習が面倒っていうか、その移動が面倒で面倒

で。笠見さんもうすぐ体験することになるよー、あのうだうだを」
中谷会長は意地悪げに笑うと、「うだだー、うだだー、うだうだ
でー」と、かの有名な曲を口ずさみ始めた。正しくは「うらら」だ
った気がするけど、敢えて訂正はしない。

「……中谷会長は社交的ですね」

今朝まで全く接点の無かった人と帰り道を歩いているのだと考え
ると、不思議だった。

事なかれ主義の私。親しく声をかけてきた中谷会長を苦手に思っ
ていた。『BLACK D●T』に向かう道では、まだ苦手だった
はず。

でも、現在の状態はどうだ。仲良く並んで下校中。不思議だ。

相変わらず「世界いー、一のー、オトコだけー」と雫が飛ばない
程度に傘を回しながら歌っていた中谷会長は、私の声に気付いて歌
と手を止めた。

「社交的？ まあ一応O型だけど」

「そういう占い、信じてるんですか？」

「いやー、そんなに。あ、でも面白いから否定はしてない」

尋ねる前から、そんな答えがくる気がしていた。

「どうして俺が社交的だって思ったの、笠見さんは？」

私は少し躊躇った末に、私の思っていた『先輩後輩論』を話した。
関わりあうことが無ければ、というやつだ。これを話したことによ
って、話しかけない方が良かったのかと後悔されるのは悪い気がし
たし、それは本当に今更過ぎる話だ。

だから話すのを躊躇ったんだけど、

「それなのに中谷会長は、朝知り合っただけの私を雨宿りに誘って

くれたので」

「あー、なるほど」

中谷会長は、ふんふん、と何度か頷いただけだった。

これはこれで何だか逆に気を使う。

「今は、別に何とも思っていないですよ。いいお店教えてもらいましたし、この傘も安くしてもらいましたし、あの、むしろ感謝してます」

「いやいや、感謝なんてそんな」

あまりの反応の薄さに、実は心底落ち込んでいるんじゃないだろうかと心配になる。

だけど、伺うように見た中谷会長の表情は笑っていた。

「つかね、笠見さん」

「はい、何ですか？」

中谷会長が急に真っ直ぐこっちを見たせいで、思わずたじろぐ。

「俺と笠見さんって、今日の朝、偶然知り合っただけって仲でもないんだよ」

それは。

——生徒会長と新入生？

——先輩と後輩？

——そういうことじゃなく？

疑問符満載の私に、中谷会長はニッと笑って傘を回した。

「一方的にだけど、——……俺、ずっと笠見さんのこと見てたから」

読書家にも苦手ジャンルはある。私の場合それは恋愛小説だ。

……この状況、どうしろって。

陽ちゃん登場

「だっはっはっはっはっ！」

私の話を聞いた陽介さんは、カウンターにうつ伏せて盛大に笑った。

「なに、あいつ、まじで……っははっ、ははっ……っく」

最後には笑い過ぎたせいで咽せかえり、しばらく古場さんに背中をさすってもらっていた。私はそれをなんとも言えない気分で見ると、そんなに笑うことか。……ことなのだろう。彼を幼い頃から知る立場からすれば。

「けほっ、けほっ。っあー、悪いな古場。もう大丈夫だ」

「……笑い過ぎだろう。いくらなんでも」

陽介さんの言葉に、呆れたような表情で古場さんは手を離した。

「しかし、アイツの告白シーンなんて想像もしたことなかったからなあー」

ようやく収まってきた咳に、陽介さんは眼に溜まったままの涙を拭った。

「なんだ？ その熱烈な台詞回しはじいちゃん譲りか？」

と言いながら喉の奥で笑い、

「お前にもその血は流れてるだろ」

と古場さんに指摘される。

ライターを手で弄びながら、「じゃあ違うな」と陽介さんは一人頷いた。

というか、熱烈も何も、あれは。

「告白じゃないんですよ」

「アナタを見つめてました宣言が？」

面白そうに目をくると回す陽介さんに、その時のことを思い出しつつ、少しだけ眉間に皺を寄せて私は強く頷いた。

お隣さんは、お向かいさんでもありました。

＊

あの日、中谷会長は「見てたから」の後にこう続けたのだ。

「おっかしな子だなあー、ってさ」

今思い出しても、中谷会長だけには言われたくなかった言葉だ。

「笠見さんって休憩中もよく席で本読んでるでしょ。休みの時間、俺は友達と廊下で喋ってるから、よく見えるんだよね」

その反対側の私は、全く気付いていなかった。

中谷会長のクラス（二年四組）と私のクラス（一年四組）は、東棟の三階と、西棟の三階の一番右端であり、中庭を挟んで丁度向かいの場所にあたる。

中谷会長が教室から出て廊下に立てば、私の教室は丸見えだ。そして私は窓際の席である。クラスメイト同士が名前を覚えるまでは席替えをしない、という、生徒にとってはあまり嬉しくない担任の取り計らいにより、二ヶ月前からずっと。

「で、いつだったかな。ある日に暇だから観察してたらさ、笠見さん、それまではほとんど動きもせずじいっと本を読んでいたのに、雨が降り出した途端、くわっ！ て、もの凄い怒った顔で空を睨んだんだよ。初めて見たときは、びっくりものだったね」

中谷会長はその日からよく気にかけるようになったんだけど、と面白そうに笑った。

笑えない。その行動に覚えがあり過ぎる私には笑えない。

「雨が降るたび、毎回やってたよね」

——……日常と化してますから。

私はそこまで人の眼を気にして生きてはいないと思う。

それが人の迷惑にならない限りは自分のやりたいようにする、というのが私だ。それでも気付かないうちに見られていたと知ると、怒りのような恥ずかしさのような、居た堪れない気持ちになった。

……しかもどうしてそう微妙な場面を……。

中谷会長は閉口した私を覗き込んで、ニッと笑った。

「今日の朝、それに帰り際に会ったのは偶然。だけど俺はずっと、いつか機会があったら親の仇のように雨を睨んでる向こう側の校舎のおかしな子を、『BLACK D●T』に連れて行ってみたいって思ってたよ」

「……念願が叶って良かったですね」

半眼でそう言った私に、中谷会長は「うん、良かった」と満足げだった。

笑うバンダナのおとこ

＊

回想終了。

——ごんっ。

「……っく、ば、馬鹿だろ、アイツ……！」

「俺には、お前も雨里も同じように見えるぞ」

カウンタ―に額を打ちつけたまま笑いを堪えている陽介さんに、古場さんが心底呆れた声を出した。今日は生徒会の関係で学校に居残りだとむくれていた中谷会長を思い浮かべ、ですよね、と、私は古場さんに頷いてみせた。

あの日から三週間。

私は既に片手指以上の回数だけ、『BLACK D●T』を訪れていた。中谷会長と一緒にいた時もあるし、一人だった時もある。

雨が降っている日は、ほぼ毎日来た。梅雨の季節ということもあり、私が此処に来た回数は店の存在を知って三週間にしてはかなりの多いものだ。けれどそのお得さを知ってしまったからには、私には雨宿りサービスが逃せないものに思えてしまっただけで仕方が無かった。

私の前に湯気立つカップのある今日も、外からは雨音が聞こえている。

陽介さんとは、『BLACK D●T』二回目の来訪で対面した。

陽介さんを初めて見たときの印象は、「大きくなった中谷会長」だ。それほど二人はよく似ている。中谷会長が制服を着替え、髪を少し切り、頭にバンダナを巻き、ピアスを開け、伸長差をカバーする分の厚底靴を履けば、それが陽介さんだと考えていいぐらいだと思う。

顔のパーツはほとんど同じで、違うのは陽介さんの方が吊り目がちだということと、中谷会長の方が若干幼く見えることだけだと言える。二人とも、お祖父さんの若い頃に似ているとよく言われるらしい。

あらかじめ従兄だと聞いてはいたけど、カウンターのの中の陽介さんとカウンターのこちら側の中谷会長、二人の顔が並んでいるのを見て、私は思わず「兄弟でしたっけ」と尋ねてしまった。

そしてやはり、聞いたところによると、同じ苗字だということもその理由の一つであるとはいえ、そう間違えられることがとても多いのだとか。

「いやー、俺にはそんな思わせぶりなことは出来ねえな」

「どの口が言う、天然タラシ。学生時代を忘れたとは言わせないぞ」腕を組んで首を傾げる陽介さんの肩を、古場さんが小突く。

恨みがましい声で「学部の女の子が何度俺に泣きついてきたことか」と言うものの、その表情は笑っていた。それが積み重なったせいで慣れてしまった、という諦観の苦笑だ。

「え、そんなことあったのか？　ちょ、言えよ、そういうことは」

古場さんの言葉を聞き、陽介さんが慌てる。

しばらくはやにやと笑う古場さんに食って掛かっていたけど、ふと真面目な表情になったかと思うと、陽介さんは私に尋ねてきた。

「もしかして、颯子ちゃんも俺のこと天然タラシだと思ってる？」

「あ。……えっと」

今は思っていない。

——まあつまり、前は思っていたということだ。

純度の高い才能持ち

初めて顔を合わせて互いに自己紹介をした時、陽介さんは、

「古場を苗字で呼んでるみてえだけど、颯子ちゃんには俺のこと、名前で呼んで欲しいな」

そう言って、中谷会長そっくりにニツと笑ったのだ。

本や漫画では、親しくなりたい相手にそう頼むパターンはよく眼にする。でも、実際に「名前で呼んで」と言う人なんて、私の人生の中では陽介さんが初めてだった。

——まあもちろん、あの中谷会長の時と同じくこれにもオチがあるって。

「雨里が中谷会長って呼ばれてるだろ。で、俺も高校時代に会長してたことがあるから、一瞬戸惑うんだわ。だから陽介の方で頼む」と、その台詞の後に陽介さんは付け加えたのだけど。

「……大事なことを後に回す喋り方が、誤解させやすいのかもしれないね」

風貌だけでなく、そういうところも中谷会長と陽介さんは似ているのだ。

その時のことを思い出しながら答えると、陽介さんは自分の中では思い当たる節が無いらしく、

「そう……か？」

と、首を傾げていた。やっぱりか。

「それはそうと、中谷。雨里の分だけ残して、七月、早く並べてこい」

古場さんの言葉に、陽介さんは思い出したように手を打つ。

7月1日である今日は、あの月雨シリーズの新商品、『七月の雨』の発売日だ。以前買った『五月の雨』が気に入った私も、今日ここに来て一番にしたことは『七月』を買うことだった。きっと中谷会長もそうだろう。

陽介さんは弄んでいたライターとカウンターの上のタバコをポケットに入れ、ついでに吸ってくる、と立ち上がって二階へと上がっていった。『BLACK D●T』で喫煙してもいいスペースは、二階の窓際だけなのだ。

その、陽介さんが階段を上がる足音が止んで。

「笠見さん。君は言葉をオブラートに包むのが非常に上手い。――……で、」

チーズケーキの乗った皿を手渡してくれながら、古場さんがにやっと笑った。

ちなみに今日のお茶請けであるこのチーズケーキは、南大路の『silk y』というケーキ屋のものだ。北一の女子高生にも評判の、舌触り滑らかなケーキである。

「――実際のところは？」

抱えていたカップを置き、両手で皿を受け取って、私も古場さんと同じような笑みで答えた。

「初対面の相手を自然にちゃん付けで呼んじゃうあたり……、才能感じます」

古場さんと顔を見合わせ、「天然タラシの?」「天然タラシの」と笑いあう。

陽介さんからは、私は初対面から「颯子ちゃん」だった。中谷会長と古場さんからは「笠見さん」と呼ばれていたし、この

歳にもなるとちゃん付け（しかも異性から！）で呼ばれる機会も少ないので、陽介さんが当然のように私をそう呼んだ時にはひどく落ち着かなかった。正直恥しくて、でも、ちよっとときどきした。

ただし、そんなことを自然とやってのけてしまう陽介さんが軽薄かと言われると、それはなんだか合わない気がする。言葉から感じられるマイナスイメージから彼に当てはめたくないという気持ちを抜きにしても、だ。

外見や口調からそう見えるというのはあるかもしれない。実際初めの頃、それこそ「颯子ちゃん」と呼ばれた頃には、私自身そう見ていた。しかし色々と言葉を交わして陽介さんのことを知っていくのに従って、その第一印象は変わっていった。だから古場さんと頷き合う肩書きも「女タラシ」ではなく「天然タラシ」なのだ。

今の私の中で陽介さんは、むしろ面倒見の良いお兄さんというよ
うなキャラ付けがされている。

……まあそれはもしかすると、陽介さんが中谷会長と上手くやり取りしているシーンを私がちよくちよく目にしているからかもしれないけれど。

しましましま

「でも、確かにな。女性で中谷が苗字で呼ぶ相手って言うと、俺でも一人しか浮かばない」

そう言う古場さんは、頭の中でその人を思い浮かべているのか斜め上を見上げていた。

古場さんは何か考え事をするときに斜め上を見る癖がある。常連となって気付いたことの一つだ。

思考をそちらへと戻して、私は言葉を返す。

「一人は居るんですね。良かった、……っていうのも何かおかしいですけど」

古場さんは苦笑して、気持ちは分かって頷いた。

「まあ、あれも天然タラシを裏付ける話だけだな」

「どういう話ですか？」

恋愛小説は苦手でも、身近な人の話なら興味深い。

そんな私を見て古場さんは「喰いつくなあ。笠見さん、恋愛モノは嫌いじゃなかったか？」と軽く笑った。

ミステリー好きである古場さんとは、以前、『ミステリーにおける許せない犯行動機談義』をしたことがある。私が恋愛小説は苦手だということは、その際にぼろっと零しただけのはずだ。よく覚えているものだ。驚くと同時に感心した。

「えーっと、それはそれ、ということだ」

首をすくめつつ誤魔化すようにして笑うと、古場さんはその気持ちも分かると頷いた。

「笠見さんも知ってる人だよ。ほら、雨里と同じで月雨シリーズが好きな」

——ああ。そうか。

古場さんの言うその人物に思い当たり、私の顔は綻んだ。

「葵さんですね」

「そう。しましま真島、だ」

＊

葵さんは、古場さんと陽介さんの後輩にあたる人だ。

鷹据駅からひとつ隣、長岳駅の近くにある大学に通っている現役女子大生で、『BLACK D●T』の常連さんの一人でもある。

私もここで一回だけ顔を合わせていて、その時には店員の二人と中谷会長を仲介に、意気投合をした。

——「私は真島葵。真実の島で『マシマ』。『マジマ』じゃないから注意してね？」

——「颯子ちゃん、高校一年生なの？　じゃあ青春中だ、若いねー」

——「でね、その今川教授いまかわは私のことを未だに『マジマくん』って呼ぶの。私はマ、シ、マ、だって何度も言ってるのに。だからもう『何ですかイマガワ教授』って言ってやろうかって思ってるんだけど」

葵さんと話していると、きょうだいは第一人の私は、お姉さんが居たらこんな感じかなと思わず想像してしまった。葵さんは優しくて大人で、だけど古場さんと陽介さんが「うちのイメージマスコット」というのが頷ける、可愛い人だ。

——「『しましま真島』は一時流行った渾名なの」

ある日、葵さんは大学に着て行ったボーダーのセーターを何人もの学生から褒められた。

デザインが可愛い、色がきれい、よく似合っている。葵さん自身も気に入っているセーターだったため単純に嬉しく思っていた。

そして気付けば、その日のことから、誰かがふと苗字と韻を踏んで口にした「しましま真島」という渾名が、いつの間にか広がっていたのだという。

——「別にイヤな渾名だったってわけでもないし、そのおかげでちょっといいこともあったし、周りが呼んでたのも結局は秋だけだったんだけどね」

——「ちなみに、今度は冬にかぶって行った青いふわふわの帽子を見て『あおあお葵』って言い出した人が居たの。そっちは全然流行らなくて、言い出した人は『めっちゃハズした感するんだけど』ってすごく恥ずかしがってたなあ。私は嫌いじゃないけどな、あおあお」

——「でもちょっと言いにくいかもね。あ、お、あ、お、あ、お、い。母音が七つだし」

——「あおあお。あおあお。あおあお。……あごが疲れてきちゃった」

その話も、葵さん本人から聞いたことだ。

『葵』

＊

「陽介さんって、葵さんのことは真島って呼んでますね、そういえば」

私の言葉に、古場さんは、だろ、と言いながら階段の方をちらりと見やった。

陽介さんが降りてくる気配はまだ無い。

「……真島と俺たちは年次混合のグループ授業で知り合ったんだけどな」

古場さんは自分の分の珈琲を淹れながら話し始める。

「その授業担当の教授は、なかなか名前が覚えられないからって、学生ひとり一人に名札を配ってたんだ。その名札のプレートに、学生の大体はフルネームを書いた。苗字だけ書いたやつも二、三人居た。けど、真島だけはそのプレートに名前だけを書いたんだ」

マドラーでカップをかき混ぜながら、

「さて、何故でしょう」

と古場さんが笑った。

古場さんは話を聞かせる相手に問いかけることが多い。これも常連となって気付いた。

「ええっと……」

——私がその状況だったら、多分、苗字だけを書く。

だけど葵さんは名前だけを書いた。それは何故か。

「プレートの大きさは？」

「『真島葵』。三文字くらいは楽に入るサイズだ。よっぽどデカい字じゃないならな」

「全部で七文字の名前をフルネームで書いたやつも居たぞ」と古場さんはにやにや笑う。――悔しい。しかもその七文字っていうのがどんな名前なのか気になる。

名前で書いたってことは、名前で呼んで欲しかったってことでいいと思う。

じゃあ、名前で呼んで欲しかった理由は？

……思い浮かぶのはやっぱり――、

「名前がすごく気に入っている、とか」

ミステリー好きの古場さんにそんな答えはアリだろうか、と思いながら言ってみる。

すると意外にも、ああ惜しい、と古場さんはにやにや笑いを引っ込めていた。

「そっちじゃなくて、真島、が、こだわってることの方を考えるんだ」

古場さんの言い方はヒントだったらしい。おかげで閃いた。なるほど、名前じゃなくて。

初対面で陽介さんが「名前で呼んで」と言ったのに対し、本や漫画の中のような現実味の無い言葉に、私は違和感を覚えた。だけどそれには理由があった。それが「中谷会長」が誰をさすのか混濁するのを避けるためというもの。

そしてプレートに名前だけを書いた葵さんの、その理由は、

「苗字を読み間違えられるのが嫌だった？」

「はい、ご名答」

珈琲を啜りつつ、古場さんはカップを持つ手とは反対の手で指を立てた。

彼女のなまえ

＊

真島葵は、自分の苗字を間違えられることを嫌っている。

小学校低学年の頃はまだ、間違えられる度に「先生違うよ、私はマシマだもん」と笑顔で訂正をしていられた。だがそれも、学年が上がるごとに出来なくなった。

――私は「マシマ アオイ」だ。

――何度も注意しているのに、どうして覚えてくれないの。

――私は「マジマ アオイ」じゃない。

だけど、それは周りにとってはそこまで気にすることではないのだろう。

今ではむしろ変わった名前が多く、その読み方の方が問題になっている。注目はそっちへと向き、苗字の濁点を取るに足らない些細なことだ。

いちいち苛立ちを感じる自分が敏感過ぎるんだ。

そう思い、真島葵は何度もそれに慣れようと思った。

しかしそれでも。

「マジマさん、これってさ……」

――違う。

「もしもし。マジマさんのお宅でしょうか？ 私は××の……」

――違う。

「あ、そういえばマジマさんは……」

――違う、マジマじゃない。

しかしそれでも、『マジマ』と呼ばれるとどうしようもなく嫌な気持ちが始まるのは、止めることが出来なかった。

間違われることに慣れられない。その苛立ちが止められない。

でも、いちいち反応して不機嫌になるのは周りに迷惑だ。それはよく分かっていた。

……それなら。

「ん？ 君のプレートに書かれているのは、名前の方かな？」

「はい。ちょっと個人的に、そっちの方が」

それなら名前で呼んでもらおう。間違われることの無いように。

こうして、真島葵はその授業内では名前で呼ばれるようになった。同期生の友達同士ではそもそも名前で呼び合っているし、名札を付けるグループ授業で仲が良くなった友達も、他の人に真島葵のことを話すときには「葵ちゃん」という呼び名を使う。

それらが重なっていくことで、真島葵は周囲から「葵」の呼び名で浸透していた。

どうして名前で呼ばれることにこだわるのかと尋ねてきた者は何人も居た。

苗字が嫌いなのか、家に所属している証のようで嫌なのかと問われる度に、そうじゃないんだけどと曖昧に笑った。

言い間違えられるのは確かに嫌だ。それでも真島葵は自分の苗字を嫌ってはいなかった。だから笑いながら悲しく思っていた。

しかしそれは仕方の無いことだ。真島葵は自分にそう言い聞かせる。

自分がとった行動は、苗字が嫌いだと思われても当然のような方法なのだから。

名前で呼ばれるのが定着して、しばらく。

それはつまり、真島葵のことを「真島」と呼ぶ者が激減した頃。

真島葵は、とある教授に呼び止められた。

彼のやり方

「えーっと、マジマさんだったかな。ちょっといいかな」

真島葵とはあまり接点の無いその人は、真島葵を間違った苗字で呼び止めた。

頭の奥に沸き起こった軽い苛立ちを押さえ、真島葵は足を止め、振り向く。

「何で、」

不快な気持ちが見れてしまっているその顔の、

「……す、か？」

頬を、突然横から伸びてきた指が突いた。

「残念でしたー、彼女は『マシマ』ですよ。竹岡せんせ」

その指は軽やかに笑う声に合わせて、二度三度、頬はむにむにと突き続けられた。

真島葵がそちらに眼を向けると、「な？」と自分に笑いかけているのは、あのグループ授業をとっている先輩の一人だった。もちろん顔は何度も合わせたことがあるし、その際に会話をしたこともある。けど、その時は自分のことを「葵ちゃん」と呼んでいた人物である。

だから、驚いた。

「で、漢字は鳥の点々が山になった方だったよな、真島？」

まるで前からそうだったかのように、自然と苗字で呼んでみせる

彼——中谷陽介に。

「そうです、えっと……中谷先輩」

「おっ、ちゃんと覚えてくれてんだな。嬉しい嬉しい」

うんうんと頷く中谷陽介を見ているうち、真島葵の中で驚きや困惑より嬉しさが勝ってきた。

周りの学生で自分のことを「真島」と呼ぶ人などもう居ない。

その現状は自分がそうさせたことだった。望んだことだった。：

：それでもやはり寂しい気持ちはあったのだ。

真島葵は自分の苗字を決して嫌ってはいなかったのだから。

「そうだったんだ？ あー……ごめんね」

二人のやり取りを見ていた竹岡は、本当にすまなそうに苦笑いを浮かべていた。今度からは気をつけるから許してやって、と手を合わせる教授の姿に、真島葵はむしろ恐縮してしまった。

「いえ、あの……真島、です。よろしくお願いします」

言いつつ頭をちょこんと下げると、

「うん。よろしく、真島さん」

と、今度は正しい読みでそう言われた。

言い直された「マシマ」の響きが、その時の真島葵には普段以上に嬉しく思えた。

心が軽く、浮かんだ笑顔は本当のものだった。

そうして笑い合う学生と教授に、そういえばと口を出したのは、未だ横に立つ先輩だった。

「真島って、竹岡先生の担当講義は取ってないんだっけか。毎回の出欠の確認で名前読み上げてたら覚えられてたんだらうけど、字面

だけじゃちよつと読みは判別しにくいだろうからな。むしろ竹岡せんせ、接点ほぼ無い新入生の名前よく覚えてましたね」

その言葉に、そうか、と真島葵は目を見開いた。

読み間違えられたことに気を取られ、そちらへの苛立ちしか感じていなかったが、確かにそう言われてみると真島葵の苗字は字面だけでも覚えられていたのだ。中谷陽介の言葉通り、自分は竹岡と接点などほとんど無いにも関わらず、だ。

それは、ありがたく、嬉しいこととも言えるのではないか。

額をかいいた竹岡が、ぼんやりだけど一応全員覚えたんだよ、と笑う。

「今度から読みもちゃんと見ておかないとなあ。悪かったよ」

「でも、今日でもう真島のことは覚えられたでしょう？」

「そうだね、ばっちり。君たち二人は学年違ったと思うんだけど、サークルでも一緒なの？」

中谷陽介の確認に応え、ついでのようにひょいと訊ねた竹岡に、真島葵は首を振った。

「あ、隅田先生の――」

しかし彼女が続けて説明をするよりも、彼の方が早かった。

中谷陽介はニツと笑うと、

「いやいや、だってほら、可愛い子にはチェックをいれちゃうもんですよ」

真島葵の頭にぽんぽんと軽く手を乗せ、あとまあ同じ講義取つてますしと付け加えた。

クサイ台詞と行動に気恥ずかしさと嬉しさを感じている様子の真島葵を見て、「なるほど、よく分かった」と竹岡が笑った。

そんな雰囲気に乗せられて、

「お眼鏡にかかれて、光栄ですよ」

吹っ切れたように真島葵が笑ったその日以来、中谷陽介は真島葵を苗字で呼ぶようになった。

第二問とその答え

＊

「――と、まあ、そんなことがあったらしい」

古場さんはまず、葵さんから聞いたのだという話をしてくれた。その話を聞きながら情景がありありと浮かべられた私は、色々と複雑な感想を言う。

「『長丘大学物語』。主演、真島葵・中谷陽介。……どこの恋愛ドラマですか」

古場さんはくつくつと笑い、「気が向いたら脚本でも書いてみてくれ」と眉を上げてみせた。

冗談でもよして欲しい。この私が恋愛ドラマの脚本を書くなんて考えただけでも薄ら寒い気持ちにする。

「で、今話したこの日から二日後ぐらいにな。俺と中谷と真島が揃ったことがあったんだ。その時に真島が、自分の苗字を覚えていた本当の理由は何故かと尋ねたわけだが、」

そこで一度区切り、古場さんは「さて、何と答えたでしょう」と笑った。本日二度目だ。

カップを両手で包み、私は考える。

ええと、陽介さんの言いそうな言葉……陽介さんの言いそうな……

「……『真島って苗字が似合うなあと思って覚えてた』？」

このレベルでは別に恥ずかしいものじゃないのに、さっきの話を聞いた後でそれを陽介さんが言っているところを考えると、なんだかむずむずする。

「ほう。そう来たか」

「そ、……そう来たかって何ですか」

腕組みをして私を見る古場さんに、そのむずむずが増す。

「違うなら違うって言うってください、なんか……恥ずかしいので」
視線を落とす私に、古場さんは苦笑しながら「じゃあ、はずれ」と言い切った。

「中谷のことだし、『葵』って名前の方でならぺろっと言いそうだけれどな。……いや、既に言ってたか？」

そう付け加えながら、自分は絶対に言えない、といった表情を浮かべている。

でも、この何処かこそばゆい台詞で、惜しい、では無いならば。

「今回は口説き文句風じゃないんですね」

「まあ、そうだな」

——それなら、こういうのはどうだろう？

「『同じ苗字の人が知り合いに居るんだ』、とか」

「さすが笠見さん。さっきから着眼点がいいな。九十六点ってところだ」

九十六点。まずまずの成績だ。でも、これ以上の点数は狙えそうにない。

次の答えを待つ古場さんに「……正解、お願いします」と両手を挙げて降参を示せば、笑って教えてくれた。

「正解は、『高校時代のダチに、ヤマサキってやつが居るんだ』、だ」

きつとその時の陽介さんは、あの、ニツとした笑みを浮かべてい

たんだろう。

「ああ、その人も……」

言葉の意味を理解して私は納得する。

そんな私に一度頷いてから、古場さんは話を続けた。

「そう。『ヤマザキ』って呼ばれるのが嫌で、そう呼ばれたら絶対に言い直させていたらしい。そんな友達が身近に居れば、影響も受ける。それで、中谷は人の名前の読み方には特に注意するようになったんだとさ」

——地域によって、その一般的な読まれ方は違う。

真島の『島』を、『シマ』と読むのか『ジマ』と読むのか。

山崎の『崎』を、『サキ』と読むのか『ザキ』と読むのか。

今川の『川』を、『カワ』と読むのか『ガワ』と読むのか。

同じ都道府県内でも、東部と西部や、山間部と平野部など、地域によって読み方が違うものだってあるだろう。それを「だから間違えても仕方無い」と思ってしまうことは出来る。育ってきた周囲の環境による認識はなかなか変えられないものだ。

でも、誰だって自分の名前を間違えられるのにいい気分はしないはずだ。

陽介さんは身近にそう言った人が居たという経験から、「仕方無い」ではなく、「だから気をつけよう」と意識するようにしているのだ。気配りが上手いというか、思いやり深いというか、神経細かいというか——言い方は様々だけど、それは誰にとっても嬉しい心構えである。

そういうところが、彼が軽薄という一言に済まされない理由の一

つと言えるだろう。

同士からのお誘い

私が感心していると、階段から足音が聞こえてきた。

古場さんと私は互いに目配せをして、今までの話を無かったことにする。

「ご苦労さん」

素知らぬ顔をした古場さんが、降りてきた陽介さんに声をかける。片手をあげて答えた陽介さんは、手に持っていた携帯電話をカウンターに置き、俺にも珈琲、と古場さんにねだりながら私の隣に座った。

「いつもより長かったな、一服を満喫してきたか？」

そう言いながら、古場さんがステンレスのヤカンの湯を温め直す。

『BLACK D●T』では給水ポットを使わず、湯が必要なときはいちいちヤカンで沸かさなければならぬ。飲み物づくりを担当することの多い古場さんが中学生の頃にポットで火傷をしたことがある、その時からポットが苦手だからだということだ。

「自分らの分くらい面倒だからポット使おうって俺は常々言っただけだな。湯を注ぐときのハネ、アレが危険だって言っただけは譲らねえんだ。そんなの、ヤカンでも同じことだと思わねえ？」

今回とは逆に、その話は古場さんの居ないところで陽介さんから聞いた話である。

「あー、それだけだな」

カウンターの上の携帯電話を指で小突いて、陽介さんが説明する。「一服の最中に電話があつて……」

数秒間だけ何か考えるように押し黙った陽介さんは、ふと私の方
に向き直った。

「颯子ちゃんって、映画はレンタルになってから家で見る方が好き
？」

「……内容によりですけど、気になるものは早く見たいです」
見たい見たいと思いつながらも機会を逃し、公開期間が終わってし
まうものが多いけど。

陽介さんは「あ、俺も」と笑いながら「見逃すことが多くて、結
局レンタルになっちゃうんだけどな」と頷く。まったくその通りだ。

「ちなみに、『街灯とサックコート』とかに興味は？」

陽介さんの言葉を聞いて、私は眼を見開いて口元を緩めた。

「野洲京輔ですね」

口に出した人名に、お、と声をあげた陽介さんが嬉しそうな顔を
する。やはり、陽介さんも知っているらしい。

「もしかして颯子ちゃん、原作読んだ？」

「読みました。文庫版も持ってます」

「おお、俺、ハードカバーの方。つか文庫版出てんの？」

「去年の秋ごろに。装丁も格好いいし、ハードカバー買うかどうか
迷ってたんですけど、やっぱり高いし。文庫版、ずっと待ってたん
です」

『街灯とサックコート』というのは、今週末から公開の映画のタ
イトルである。

野洲京輔という作家の同名の小説が原作で、私はその小説を中学
生の頃に読んだ。すらすら読めるのに心情描写はとても豊かで、私
はその本をきっかけに野洲京輔の作品に注目するようになった。

「うわ、チェックしてなかった。文庫版の表紙は？ ハードと同じ？」

「少し違います。でも格好いいです。目次のアレもそのままですよ」
「じゃあちゃんと目次で三ページくらい使ってたんだ？」

そして陽介さんは、私と同じくらい、もしくはそれ以上の無類の読書家だ。中谷会長から聞いた話によると、陽介さんの部屋は、高い本棚が三方の壁を占めているらしい。

どちらかというと言介さんよりも古場さんの方が本をよく読んでいそうなイメージだった。しかし話を聞いたところによると、古場さんも読書家ではあるものの、雑食である陽介さんや私とは違い、読む本のほとんどがミステリーなのだという。ちなみに中谷会長は「面白くない本は読む時間が勿体無い」という気持ちから、選ぶのは好みの似通っている陽介さんから勧められたものが多いらしい。

私の周りではあまり野洲京輔は知られていない。

そのため、身近なところでの初めての同士の発見に、思わず会話が弾んでしまった。野洲京輔のほかの作品ではどれが好きだとか、あのシーンには驚いただとか、話がどんどんずれてしまう。

「……話が見えないんだが、結局、電話は何の内容だったんだ？」

それを修正したのは古場さんだった。

眉を寄せて私と陽介さんを眺めながら、香り立つ珈琲を陽介さんに手渡す。カップを受け取って、陽介さんはああそうだったと頷いた。

「で、颯子ちゃん。いきなりだけどさ、良かったら一緒に『街灯』観に行かない？」

しばらく考えて、私は小さく首を傾げる。

「でも、近くの映画館では……」

悲しいことに、上映されないのだ。——此処は所謂、地方だから。

されるとなっても、それは都会の方で公開が終了したころの話。
つまりは、まだまだ先のこと。

陽介さんは私の浮かべる表情を読み、「うん、だから」と頷く。

「県外まで。ドライブがてらに、どう？」

「え……」

映画を観に行くために県外に行く。

それを簡単に言う陽介さんの考えが、私には信じがたかった。

「……わざわざ、ですか？」

そんなことが思い浮かべられるような行動力を、私は持ち合わせていなかったからだ。

だからこそ、見たい映画を見逃すことが多かったんだし。

返答をしかねる私に、助け舟を出してくれたのは古場さんだった。

ご一緒しましょ

「あのな、中谷。常連客をデートに誘うのは勝手にしてくれたいいが、その考えまでの経緯をはっきりと説明しろ。俺は大体分かったが、笠見さんには伝わらないだろ。だからお前は天然タラシだと思われるんだ」

陽介さんとの会話に慣れている古場さんは、陽介さんの話の裏を理解しているらしい。

いや、私でも一応これがデートの誘いなんかじゃないっていうのは分かってただけだ。そもそも携帯電話での通話の内容から話が発展したんだし、……まあ、陽介さんだし。

陽介さんは古場さんからまたもや称された天然タラシの言葉に眉を寄せた。

やはり自分の中では見当がついていないようだ。だからこそ、なんだろうけど。

「で。今度は何だって？ 商品はまだ先だろ」

陽介さんに説明させようとするといつまでも話が進まない判断したのか、古場さんは自分から質問を始めた。

「ああ、月雨シリーズのことなんだけどな。他のところでも人気が出てきてるみてえで、結局、全部の月を製作することになったんだとよ。何月を作って欲しい、なんて要望の電話までわざわざ制作会社に届いたらしい」

話を聞きながら、思う。

全部の月雨シリーズが発売されたら、私も嬉しい。友達に勧めたりプレゼントしたりするのにも、その時期のものだったり、その友達の誕生月のもものだったりした方がいいんじゃないだろうか。

「だから、製作にあたって販売店や購入者の意見が欲しいって」

「そのついでに映画でも、って話か」

「そ。あいつも忙しいクセに、映画館通いは続けてるらしい」
苦笑しながら、陽介さんは珈琲を啜る。

どうやら携帯電話での話し相手は取引先、それでいて陽介さんのよく知った人のようだ。

話の流れが何となく理解出来てきた私に、陽介さんが改めて説明をする。

「県外にある月雨シリーズの制作会社に、俺の知り合いが勤めてんだ。月雨シリーズを考案したのもそいつでな、ヤマサキっていう、高校の時のダチなんだ」

陽介さんの口から出た人名に、私は思わず古場さんの顔を見た。

古場さんはそれでも素知らぬ顔で、でも口元が笑っている。

私の反応に陽介さんは少しだけ不思議そうな顔をしたけど、でもすぐに話を再開した。きつと、また何か聞いたんだなと判断したんだろう。古場さんから陽介さんのことを、陽介さんから古場さんのことを、私は二人から互いのことを伝え聞いていることが多いのだ。

「映画好きなヤツで、週末にはよく映画館に出没する。俺が月雨シリーズを受け取りに行ったときも、たまに会社帰りの山崎と待ち合わせして映画観に行ったりもする。男二人で映画なんてしょっぱいけど、あいつと一緒にだと安く観られるからな」

その山崎さんという人は年間のフリーパスを持っていて、二人で映画を観たときには、陽介さんの分のチケット代を割り勘してくれることもあるのだという。「ま、ドリンク代は俺が払ったりもするんだけどな」と陽介さんはニッと笑った。

「で、さっきも言ったように、山崎は月雨シリーズについての意見を欲しがってんだ。商品を考案する人間にとって、その利用者の意

見は貴重だからな。とはいっても、会議に参加するわけでもないから、そこまで深く考えなくていい。俺と山崎と一緒に、月雨シリーズについて喋るだけだからさ」

私を安心させるようにそう言って、陽介さんはカウンターの卓上カレンダーを指差した。

「今のところ、予定は来週の土曜日。良かったら、颯子ちゃん一緒に来てくれねえ？」

私は頭の中の予定をカレンダーに照らし合わせてみる。

とはいっても、私のスケジュールに予定はほとんど入っていない。週末の休日二日間に私がすることといえば、いつもと同じく読書が主である。スケジュール面で断る理由は何も無い。

始めは「意見なんて言えない」と焦ったけど、それだって堅苦しいことを言わなくていいみたいだし、それに極めつけは『街灯とサックコート』だ。すごく、観たい。

うん。スケジュール面以外でも、私から断る理由は何も無い。

「行きたいです、ぜひ」

「よっし、決まりだな」

頷いた私に、陽介さんは満足そうに笑った。

その隣で珈琲を啜る古場さんが静かに言う。

「笠見さんの親御さんに顔向け出来ないような目には合わせるなよ、頼むから」

「あ、の、なあ。折角行く気になってくれたんだから、そういうこと言うなっつての」

——…古場さんの冗談とはいえ、ちよつと不安になりました。

気怠い朝のこと

＊

昨日の夕方から夜にかけての雨は凄かった。雷も鳴っていた。

その雨が降り出した頃には私は既に帰宅済みだったからマシだったけど、もしも下校途中にあの雨が降っていたのなら、私の苛立ちは凄まじいものだっただろう。お得な『雨宿りサービス』も、それを癒すことは出来なかったに違いない。早く帰ってて良かった。

昨日のうちに降りつくしたのだろう、今日は朝からいい天気だった。

本格的な夏っぽさはまだ感じられないけれど、今日の太陽は今までよりもぎらぎらして見える。

だから、だけど、その分だけ、

「暑い……」

私はため息を吐きながら、次のページを捲った。

晴れの日には徒歩で登校することになっている私は、今日も北大路を歩いてこの教室までやってきた。そのせいで身体が温まったこともあるだろう、自分の席について教科書を引き出しに移し、鞆から読みかけの本を取り出した頃には、首筋にじんわりと汗をかいていた。今日からいきなりこんなに気温が上がるとは思っていなかったから、スカートは夏用の薄いものに変えてきてはいない。

冬はありがたい厚手のスカートの重みが恨めしい。教室のあちこちでも、

「いつスカート変える?」「私、明日」「どうしょっかな」

と、クラスメートの女子達が輪を作って相談している。

手元のページに視線を落として、私はその内容に集中することにした。

本の中は秋。

主人公はイチヨウにはしゃぐ保育園児たちを時折眺めながら、公園のベンチでゆったりと本を読んでいる。まだ肌寒くも無い気温は、心を落ち着けて読書をするのにぴったりだと胸中で思っている。

——ああ、まったく羨ましい。

「颯子、聞いて聞いて昨日の話っ」

そんな気持ちをぶつ切りにした声の持ち主、つまり私の友人は、朝の一言目が「おはよう」だとは思いつかなかったようだ。

私は結局五分も集中することの出来なかった本を閉じ、

「おはよう。暑いね、今日」

その友人——松坂夕香へ、言葉を返した。

gentleman

見た目は大人しそうに見えるこの小柄な少女は、部活動のバトミントン部で速球のスマッシュをバンバン打つような子で、文字ばかりの本を読むことは嫌いなのに本の挿絵を想像して書くのが好きで、名前のことを「松坂牛か」とからかうと烈火のごとく怒り出す、私とは保育園に通っていた頃からの友人である。

夕香は眉を寄せて頷きながら「ね、今日暑いよね。戸部さん大アタリ」と毎朝やっているニュース番組の気象予報士を賞賛した。
私の友人は、テレビっ子でもある。

「それで、昨日の話って？」

閉じた本の表紙を眺めながら促すと、夕香は「あのね」と意気込んだ。

「私、ジェントルマンに会ったの」

「……白ヒゲでステッキ持っていて小指立てて帽子取るような？」

ジェントルマンと聞いて浮かぶイメージを並べて尋ねてみた。

しかし夕香は首を振ってそれを否定する。

「見た目じゃないの、中身がジェントルマンだったの」

「中身？ レディーファーストとか、そういうこと？」

「そうそうそうそう！ すっごく優しくして、……うっかり、ときめいてしまいました」

私の友人は、照れると敬語になる。

「昨日は用事があったて帰らないといけなくて、でも部長に部活休むってこと伝えるの忘れちゃってたの。だから体育館に寄ってたたら、

帰る途中で雨が降ってきて。傘は持ってなかったから近くの駐輪場の屋根の下でしばらく雨宿りすることにしたんだけど、なかなか降り止まないし、やっぱり走って帰っちゃおうかなって思ってたの」

夕香の話を聞きながら、そういえば『BLACK D●T』のことを紹介してなかったなと思った。

この話が終わったら教えてあげよう。

「そしたら、そこにジェントルマンさんがバイクを停めに來たの。それで、私見て『雨宿り中?』って訊いてくれて、私が『そうです』って答えて。そしたらその人、バイクのシートの下から折り畳み傘出してきて貸してくれて……、ね? ジェントルマンでしょ?」

——それは確かにジェントルマン、かもしれぬ。

あまり見かけない、優しい、……いや、優しすぎるかもしれない人だ。

目をきらきらさせて言う夕香に、私は眉をひそめる。

「それで、借りたの? 初対面なんでしょ?」

その当事者からすれば嬉しかったことで済む話かもしれないけど、第三者が聞いたところでは怪しい話にも聞こえる。

表情を見て私の気持ちを悟ったらしい夕香は、ほんとにいい人だったよとその時の様子を身振り手振りで話す。

「初めは断ろうとしたの。だけど『俺はコレ着てるから平気』って笑ってくれたから。よく見たらその人が羽織ってた青い上着、レインコートだったの。『その傘もそのまま貰っていいよ』って言うてくれて。でももちろん、ちゃんと返すよ?」

それでも私が表情を変えないままで見ているのを見て、夕香は「それに」と付け加える。

「それに確かに初対面だったけど、何となく、あのジェントルマンさんが誰なのか分かってるんだ、私。颯子も知ってる人のお兄さんじゃないかな」

……ちよつと待て。

私は思いあたることがあって一瞬思考が停止した。

「夕香の予想では、それ、誰なの」とりあえず訊いてみて、

「たぶんね、生徒会長のお兄さん」
やっぱり、とため息を吐いた。

「流石に凝視は出来なかったから、はつきり見たわけじゃないけど、すごく似てた」

そう言つてにこにこと笑う夕香に、私は、へえ……と気の無い返事をする。

ええと、これは夕香を即刻『BLACK DOT』に連れて行ってあげるべきなんだろうか。

それより「お兄さんではないよ」と教えてあげる方が先だろ――、

「颯子は会ったこと無いの？」

――うか。

「なんで私が？」

眉を寄せる私に、夕香は屈託無く言う。

「だって颯子と生徒会長、付き合ってるんじゃないの？」

断言する。

そんな事実はない。

「今、私何か飲んでたら、漫画でよくあるみたいに噴出して夕香の制服汚してたよ」

「え？ あ、違うんだ？ 男バドの先輩がそんな話してたから」

私の友人は、噂好きでもある。

というか誰ですか根も葉も無い話をしていたのは。

うんざりして片手を額に当てる。その様子に「そっか、ごめんね」と夕香が両手を合わせたのと同時に、ホームルームの始まりのチャイムが鳴った。

私はまた大きなため息を吐いて、自分の席に向かう夕香にはつきりと言っておいた。

「違うからね」

ジェントルマンが中谷会長のお兄さんって推測も、私と中谷会長が付き合ってるだなんていう噂話も。

美味しい御飯

＊

私には、面倒くさがりなところもある。

「私、絶対にジェントルマンさんを探し出すよ」
「……頑張ってね」

意気込んでいる夕香を見て、まあわざわざ説明するのも面倒だし、と考えた。

夕香が自分でジェントルマンさんを見つけ出して満足感を得られるなら、その方がいいと思うし。

「ちゃんとお礼言って返すんだよ」

コロッケを箸でつまみながら夕香に忠告する。

教室の前の方には男子がかたまつて円をつくり、後ろにはいくつかのグループに分かれた女子が。そんな昼休みのいつもの光景の中、私達もいつものように夕香の机の上に二人分の弁当を広げている。

スパゲティを頬張っていた夕香は頷いて、それを飲み下してから深刻そうな声で言った。

「ねえ、やっぱりお礼の品でも準備して渡した方がいいのかな？」
「無くていいんじゃないの。傘、壊したり汚したりしてないんですよ」

——だってあの人の場合、そんなことしたら、気を使ってまた倍返してもしてきそうだ。

そんな相手の性格を知らない夕香は、箸を唇に当てたまま、うーんと考え込む。

それが『くわえ箸』になるのかどうかは分からないけど、あまり行儀がいいとは言えない。少し険しい顔を見ると、夕香は慌てて食事を再開した。

「じゃあね？ お礼じゃなくて、嬉しかった気持ちを表すために準備するのも、駄目？」

「いや、駄目じゃないし、夕香の思った通りにすればいいと思うけど、――……」

言いながら、手元にあるふりかけのかかったご飯に向けていた視線を夕香へと移す。

夕香が何でそこまで拘るのかを考えて、ふと思い至ったのだ。

「……………ひとめぼれ？」

お米の種類じゃない方の意味で。

確認するように口に出してみれば、夕香は口を閉じて俯いた。

普段から血色のいい夕香の頬が、ほんのりと更に赤くなっている気がする。……思わず箸を落としそうになった。箸が転げても笑える年頃とはよく言ったものだけど、笑えない。

「いい人だったし、それに、格好良かったんだよ！」

私の友人は、「好きなタイプは？」と尋ねられると、ほぼ「優しい人」と答える。

これは決まりかもしれない。

……いや、たぶん決まりだ。

それにしても、と頭を抱えなくなった。夕香まであの天然の毒牙にかかるとは。

もちろん『ジェントルマンさん』の行動は厚意からのものであつて、……毒牙と呼ぶのはあまりにも失礼だろう。分かっている、それは分かっているんだけど、それでも。

「やっぱり、颯子は駄目だと思う？」

何も言わない私が怒っていると思つたのか、夕香はちらりとこちらを伺っている。

「別に私、反対はしてないよ。さっきも言つたけど、夕香の思つた通りにすればいい」

「でも颯子は、その人のこと危ない人じゃないかって疑ってるんですよ？」

ああ。それはもういい。疑ってない。

最後の一口を食べ終えて、箸をケースにしまう。

「受けた親切にお礼をしようとする夕香は、いい子だと思うよ。もしも危ない人だったら、強烈なスマッシュにも即座に対応出来る夕香の足で逃げればいい」

私の夕香の足への賞賛に、

「へへ、ありがとうございます」

と、やはり照れて敬語で答えてから、夕香も弁当を食べるスピードを上げた。

それを横目で見ながら、私は読みかけの本を取り出して葉を挟んだページを開く。

「でもね、私、一目惚れなんて初めてなんだよ。どうしよう、颯子」
「……私に聞かれても。それこそ、どうしろって言ふの」

本の中の主人公は、古くからの親しい友人に、自分の抱える悩み

を吐露していた。

なかなか重いその悩みの内容に――、

「えーと。じゃあ、きっと私、颯子にいろいろ相談するから、一緒に考えてね？」

――私は主人公ではなく、その友人へとエールを送りたくなる。
大事な人の相談相手になるのは結構大変ですよ。あなたも頑張ってください。

ただし、扱いにはまだ慣れず。

＊

放課後、私は図書室に向かう。

今朝読んでいたものは昼休憩で読み終えた。今度はその続編を借りようと思っている。ちなみにその本の作者は野洲京輔である。

映画への予習、といったところだ。

少しだけ期待していたけど、図書室のクーラーはまだついていなかった。

まあ暑くなってきたとはいえ、今の時期からクーラーをつけているようでは駄目だろうとは思うけど。それに、クーラーがつくと放課後の図書室は列車の時刻を待つ生徒でいっぱいになる。私は暑い時期のそれが嫌いだった。図書室に來たなら本を読み。

「へえ。笠見さん、野洲読んでるんだ？」

本棚の前で本を選んでみると、すぐ後ろから声がかかって驚いた。振り返ると、声から想像していた人物が私の手元を覗き込むようにして立っている。この人は何かもつところ、デリカシー、の、ようなものは無いのだろうか。

……と、考えつつもあまり期待していない自分も居るのでなんともだ。

「俺もそれ好き。叔父がいいよね、叔父が」

「ああいう人、好きそうですね、中谷会長」

『BLACK D●T』のことでよく接するようになってから、私は「変な人」としてしか認識していなかった中谷会長のことが、徐々に把握出来始めていた。

やはり何処かおかしい人で、誰に対してもフレンドリーな人。

陽介さんとも見かけも中身もよく似た人。

今では、中谷会長がこの本を読んだらこの人のことをいいキャラだと言うだろうな、とまで予想が出来るようになってきた。ますます誤解を招きそうだからそんなこと誰にも言わないけど。自慢にも特技にもならないし。

「そういや笠見さん、今度、陽ちゃんと『街灯』観に行くんだっけ」

「はい。月雨シリーズの考案者さんも一緒です」

「ヤマさんでしょー。あの人も映画になったものの原作なら結構読んでるから、訊いてみると面白い本が見つかるかもしれないよ」

そう言いながら本棚から『街灯とサックコート』を手に取った中谷会長は、どこか悔しそうにもつまらなそうにも見えた。俺も借りていこつと、と笑いつつも、その表紙を見る目は諦めがつかないと気持ちを語っている。

「中谷会長は一緒に行けないんですか？」

私が誘える立場ではないとは思うけど、その表情は反則だ。共感出来てしまうし。

と、いきなり、

「うぬううううう……」

中谷会長は額に手をやって呻き始めた。
何なんだ一体。

一応は焦りながら大丈夫ですかと声をかけると、

「ああうん大丈夫なのは大丈夫。体調は万全」

と、意外とシャンとした返事が返ってくる。
本当に何なんだ。

中谷会長は顔を上げると、肩を落として私に弱弱しい笑みを向けた。

「一緒に行きたい気持ちは、凄おおおおおうく、あるんだよね。特に『街灯』って、俺が野洲にハマるきっかけになった本だしさ」

思わぬ共通点を発見した。……だからといって感慨が湧くでもないけど。

「じゃあ、予定が合わないんですか」

「うん。その土曜日って、キャンペーン参加の日なんだよね」

「キャンペーン？」

頷いた中谷会長が言葉を続ける前に、その後ろの本棚の向こうからヌツと何かが現れた。

知らないことも、まだ多く。

「……やっと見つけた」

それは、何だかバックに濃い色をしたオーラでも見えてしまいそうな表情の男子生徒の姿だった。思わずぎょっとして息を呑んでしまった。

そんな私の表情を見て何事かと背後を振り返り、『それ』に気付いた中谷会長が身を引く。

小さな声で、うげ、と漏らしたのが聞こえた。

「勝手な息抜き中に失礼だが、中谷雨里生徒会長」

中谷会長を見据えるその人がこちらに寄ってくる。

「そろそろ本気を出して仕事してくれないか。……出来るまで帰さないぞ、冗談じゃなくてな」

その言葉を聞いて、この人は確か、と記憶を探っていた私の脳が答えを出す。

そうだ、この人は生徒副会長だ。

生徒総会の時には、司会進行の役をしていた。

とても気楽そうに——いや、にこやかに朗らかに楽しそうに会場の意見を聞いていた生徒会長の隣で、ときばきと論議を進めていた。会場を煽る——活発化させる中谷会長に引っ張られて思いの外たくさん出た意見を総合的にまとめる彼の働きが無かったら、あの総会を時間内に終わることが出来たか疑問だ。

副会長は、はおそらくこの学校で最も中谷会長の面倒を見ている人だろう。

中谷会長もいつだったかそんなことを自分で言っていたように思う。

中谷会長は副会長に向け、しぶしぶと言った具合に片手を挙げた。

「生徒会の仕事ですか」

「そ。今言ってた、薬物乱用防止キャンペーンの呼びかけ文づくり。ボランティアで参加することになってるんだ。ね、仕事真面目なせーとふくかいちょーさん？」

私への返しの最後、茶化すような言い方で呼び返した中谷会長に、副会長は眉を寄せて答えた。

「それは、当日に用事があって参加出来ない俺への嫌味か」

「まっさか。その日のために桜也は今だって頑張ってくれてるじゃん」

「じゃあその頑張りを実らせてくれ」

無然とした表情のまま、副会長は持っていた紙を中谷会長の手に持たせた。途中まで作られた呼びかけ文が書かれているようだ。

「だよねえー？」

観念した様子の中谷会長は、手に持つ本を脇に抱え直し、受け取った紙を開きながら私に「じゃ、またね」と笑いかける。

「良かったら、中谷会長の分もパンフレット買ってきてみましょうか」

中谷会長が持つ『街灯とサックコート』が眼に入った瞬間、私の口はそう言っていた。

私は、生徒会がそんな活動をしていることなんて知らなかった。きっと今回のキャンペーンだけじゃない、私の知らないところで生徒会が運営していることはもっとあるんだろう。だから劳いの気

持ちを表したいと思ったのだ。――あと、北一の生徒会長は仕事を
してないんじゃないだろうか、と実は密かに思ってしまった謝
罪の気持ちも兼ねて。

中谷会長は何度か眼をしばたいた後、

「また代金は払うから、お願いしてもいい？ 感想、楽しみにして
るよー」

ニツと笑い、副会長に引きずられるようにして図書室から出て行
った。

中谷会長が利用手続きをしないまま本を持ち出していったという
ことに気付いたのはその数分後で、図書委員である私は仕方なくそ
の代わりに手続きをしておいた。

貸し出しカードに書名を書きながら、珍しく気分が高ぶっている
自分に気付く。

どうやら、思っていた以上に私は映画を楽しみにしているらしい。

いざ、出発

その土曜日はよく晴れていた。

指定された時間に遅れないよう『BLACK D●T』に向かうと、古場さんが入り口の傘立てを整頓していた。

その古場さんを見て思わず絶句し、そんな私に古場さんが笑う。

「清潔で爽やか、だろう？」

晴れた日に『BLACK D●T』を訪れたのはこれが初めてで、つまり私は、湿気によって髪の毛が増した古場さん以外を今まで見たことが無くて。

「……古場さんって、そんなに髪少なかったんですか」

「脱毛症みたいに言わないでもらえませんか」

苦笑する古場さんの髪は、震える肩に合わせてさらさら揺れた。

「ほんとに湿気に弱いんですね」

未だ驚きが続いている私に、「困ったことに遺伝でな」と古場さんが大きく頷いた。

数分も経たないうちに店の前に青い車が停まった。

聞いたところによるとその車は古場さんの持ち物で、商品を取りに行くときなどは、専らバイクが移動手段の陽介さんも使っているらしい。

運転席に座った陽介さんが助手席の窓を開ける。近づいて、古場さんが忠告した。

「気をつけてな。渋滞は避けろよ、笠見さんの帰りが遅くならない

ように」

「おう。昼過ぎに、真島が店の手伝いに来てくれるってよ。あとは頼む」

陽介さんの手招きに、私は古場さんに「行ってきます」と言い、助手席に乗り込んだ。

「おはようございます、今日はよろしくお願いします」

「ん、おはよ。そういや颯子ちゃんの私服見るのは初めてだけど、そっちも可愛いな!」

……だから、もう。

そういうことをサラッと言うの、恥ずかしくないんだろうか。

「どうも。いつもは学校帰りですからね」

それが無理なく似合ってるのが、本当の怖いところなんだけど。

私がシートベルトを締めたのを確認して、陽介さんは車を発進させる。

店の前の古場さんに手を振ってから、私は前に向き直った。

書を読む・曲を聴く

市外に出る前にコンビニに寄って飲み物やお菓子を買った。
道中それらを飲み食いしつつ、交わす会話の内容はやっぱり本のことだ。

「野洲作品の中で一番尊敬する登場人物は、『クライマータ임』の叔父だな」

「それ、中谷会長も言っていました。私は主人公の友人が好きです」

「ああそれも分かるな。二章の始め、だっけ？ ああたりとか、たまに古場とキャラが重なるときがあるけどな」

幅広く本を読んでいる陽介さんとは、とても話が合う。

読書家同士には、何となく共通した認識のようなものがある。もちろんそれは読書家同士に限らず、ほかの趣味でも同じだろう。まあともかくはそのおかげで、言いたいことをわざわざ説明する手間が省けるため、会話をするのがとても楽だ。

好きな本の傾向も似ているようで、私が好きだという本は陽介さんも同意して頷いてくれる。逆に陽介さんが気に入っているものが、私の愛読書だったりもした。

私が陽介さんが読書家だったのが意外だったという話をする、陽介さんは苦笑した。

「中学生の頃までは、俺は読書嫌いだったんだ。文字に眼を通すのが面倒くさくて。教科書が文章じゃなくて漫画だったらいいのって、授業中はいつも考えてたしな」

小学生から読書好きだった私にも、その気持ちはなんとなく分かった。

「じゃあ、何で好きになったんですか？」

「ん。これがきっかけでな」

そう言って、陽介さんは片手でカーステレオを指差した。

流れている曲は英語の歌詞で、だけど歌っているのは日本人のグループだ。何処かで聞いたことがある気がするけど、でも、そこまですぐで人気なものではないマイナーなグループのはず。

「中学の時はめっちゃめっちゃ音楽にハマってて、特にこのグループが好きだった。で、曲書いてるボーカルの趣味が読書でな。『○○』という作品をイメージしました』って曲があんだよ。それで興味持って読んでみたら、なかなか面白くて。そこから、そのボーカルが薦めてる他の作家の本も読み始めて、読書の楽しさに目覚めてきたってわけ」

今じゃ音楽より本の方が好きなんだ、と、陽介さんは笑った。

「颯子ちゃんが読書好きになったきっかけは？」

ペットボトルのスポーツ飲料を一口飲んで、陽介さんが訊く。口に飴を放り込んだところだった私は、その包みをゴミ袋に入れながら少し考えてみた。

きっかけ。きっかけと呼ぶような出来事は、無かった気がする。

「母親が読書好きっていうのはあると思いますけど、でも弟はそうでもないし」

「あ、弟が居んだ？」

「はい。中学三年で、あ、音楽好きです。勉強するときは必ず音楽かけてます。あと、試合前とかにもウォークマンで音楽を聴いてます」

私と一つ違いの、年子の弟、翔。

受験生になった今年から中学校ではテスト続きとなり、部活動の

サッカーに熱心だった翔も否応なしに机に向かうことが多くなった。勉強意欲を高めるために必要なのだと、リビングからCDコンポを自分の部屋へ持ち込んだのは五月のことだ。

——ああ、そうか。話題に翔のことが出たおかげで思い出した。

さっきまでステレオから流れていた曲は、いつだったか、前に翔の部屋から流れていたものと同じだ。

どうやら笠見家姉弟と陽介さんは、とても好みが似通っているようである。

「弟くんは音アリ派なんだな。俺と真島と同じで」

「葵さんも音楽が好きなんですか？」

「人から影響を受けたのもあるだろうけど、真島もノーマニョージュ・ノーライフ、なやつだ。大事なときの前には、必ず音楽を聴いてたな」

陽介さんたちがまだ大学生だったときの話だ。

あるとき、葵さんは一日中ウォークマンをして過ごしていた。その理由を問うと、もうすぐテストがあるのだという。

「だからこれで集中するの。この曲を聴いてると、『お前はやれるよ』って言われてるように思えるから。気休めだとは思ってるけど、それでやる気が出るならやって損は無いでしょ」

そう言って、葵さんは再び小さくその歌詞を口ずさみ始めた。らしい。

「音楽が無いと集中出来ない、俺はこの音アリ派。この言い方は、俺が勝手にそう言ってるだけなんだけどな。ちなみに古場は、音楽があると集中出来ない音ナシ派。颯子ちゃんは、どっち？」

「そうですね……本を読むときは無い方がいいですけど、勉強のときはどっちでもいいです」

音ナシ派よりの中間、といったところだろうか。

「でもたぶん、好きな曲の時は手を止めてしまいますけど」
「ああ、あるある。買い物してる店でかかった時も、つい顔上げちゃうのかな」

赤信号で車が停まる。

口の中の飴を転がしているうち、尋ねようと思っていたことを思い出した。

始まりの思い

「陽介さんは、どうして葵さんのことを今でも苗字で呼んでるんですか？」

教授の前で訂正するときに苗字で呼んだのは分かる。

けど、それまでは名前で呼んでいたならそのままでも良かったんじゃないかと、古場さんから話を聞いてから私は不思議に思っていたのだ。

眉を寄せていた陽介さんは、信号待ちの間考え込み、青に変わってアクセルを踏んだのと同時に、ああ、と声を上げた。

「古場に聞いたな？」

「あ。……えっと、はい」

しまった、と思ったのは一瞬だけ。

陽介さんも古場さんも、互いが互いの話を私に話しているのは認識していて、許容している。私は、それに甘えさせてもらっているのだ。

「簡単なことだ。ただ、真島が喜ぶからってだけ」

苦笑する陽介さんは、その時のことを思い出しているのだろうか。「自分から頼んで名前前で呼ばせてたとはいえ、大学じゃ苗字で呼ばれることが無かったからだろうな。正しい読み方の苗字で呼ばれる、それだけで真島は凄え喜んでたんだぞ。結構信じられねえ話だろ？」

「……ですね」

間違った読み方をされることの少ないカサミソウコ——私には理解し難い。

そんな私の考えを読み取ったのか、それともただの偶然か、陽介さんは私を横目で一瞥して「な？」と再び確認するように頷いてから話を続ける。

「俺も、たまに『ナカヤ』って読まれることがある。それでも真島の気持ちはよく分からねえよ。真島自身も、どうしてそんなに自分が苗字にこだわっちゃうのか分かんねえって言ってたけどな。ま、いずれにしろ、それだけで真島が喜ぶならいいかと思ったわけだ、俺は。」

だから広めたんだしな、『しましま真島』って呼び方もさ」

ニツと笑った陽介さんの言葉に、私は眼をしばたいた。

「……陽介さんが言い出した人だったんですか、それ」

「おう。真島が『このしましまの服、色んな人に褒められたんですよ』って言ってたのを聞いて、丁度いいと思ってな」

「丁度いい？」

「どういことだろう。」

陽介さんは、だってほら、とハンドルを指で叩きながら言った。

「『しましま』って先にくりゃ、その後は『マジマ』より『マシマ』って続ける方がしっくりくるだろ？　そうすりゃ、読み間違いも減るんじゃないかってな」

しましましま。しましまま。しましまま。

何度か確かめた後、成程、という言葉が思わず口から出ていた。もしかすると、葵さん本人が言っていた『しましま真島』の渾名がもたらした「ちょっといいこと」というのも、読み間違いが減ったということかもしれない。

「呼び方に気いつけるだけで真島が笑うなら、こっちだって嬉しいからな」

そう言って顔を綻ばせる陽介さんに、私はもしかしてという気持ちを持った。

——もしかして、陽介さんは。

考案者ヤマサキ

山崎さんの第一印象は、落ち着いた人だった。

待ち合わせをしているというファミレスに到着して、その店員に先に来ているという山崎さんの席へ案内してもらった。窓際の席で珈琲を飲んでいた山崎さんは、深い紺色のスーツにストライプのシャツを着ていた。しゅつと締めたネクタイに、社会人という言葉がぴたりと合っている。

よお、と片手をあげるラフな格好の陽介さんとは真逆の印象だ。

山崎さんは立ち上がり、私を見て少し眼を見開いた。

「どうせ雨里を連れて来るんだろうと思ってたけど、……ちゃんとしたお客さんじゃないか」

「こらこら山崎、雨里がちゃんとしてないお客みたいに言わねえの」

「だって彼はお客というよりアルバイトだろう？」

「いや、月雨シリーズを愛好してる大事な常連客だ」

すかさず返した陽介さんに、山崎さんは「ハイハイお前の言う通りですよ」と首を振った。

ああ。本当に二人は『ダチ』なのだ。

目の前のやり取りを見ていて、私はそう思った。

「さて、と」

山崎さんは私に向き直ると、にこっと笑って席を勧めた。

どうもと礼を言いながら席に着くと、山崎さんが改めて自己紹介をする。

「初めまして、月雨シリーズ考案者の山崎です。本日は遠いところをご苦様でした。色々とお話を聞かせてもらおうと思いますので、」

メニユーと名刺がずいっと差し出された。思わず受け取る。

「まあまずは、何でも好きなもの、頼んで？」

「あ、ありがとうございます」

車の中で昼食は済ましていたため、お腹は減っていない。

私と陽介さんは、山崎さんと同じドリンクバーを選んだ。私はジンジャーエールを、陽介さんは珈琲を淹れて席に戻り、手帳を広げた山崎さんと早速意見の交わし合いを始める。

「えーと、名前はソウコさんだよね。漢字はどういう字？」

「『立つ』に『風』、一文字の方の『はやて』です。子は、子どもの子」

「格好いい字だね。高校生、一年生かな」

そんな感じで、まずは私について質問された。これは利用者像のパターンのひとつになるらしい。

教えられる限りでいいよと前置きをした上で、山崎さんは私に部活動や趣味のことを尋ねた。答えない理由も無いので、ありのまま真実を話す。

自分の答えから、面白みの無い人間性だなあと自分の個性を疑っている、次のページに手をかけていた山崎さんが思いついたように質問を付け加えた。

「ごめん、これが颯子さんについての最後3つの質問。まず、彼氏は居る？」

私は迷い無く「いいえ」と答える。

数日前の夕香との会話が思い返されたけど、頭の中から振り払う。

……今のところ彼氏が欲しいとも思っていないし、そんな噂は迷惑だ。

「すごく親しい友達ほどのくらい？」

「長年の付き合いがあるのは一人です。クラスメイトとかとも大体仲良いですけど」

「この『月雨シリーズ』をプレゼントするとしたら、誰にあげる？」

「その親しい友達の誕生日が出たら、その子に是非あげたいですね。広めたいです」

ありがとうございますと笑って手帳のページをめくり、山崎さんは一度手を止めた。

もう温くなっているだろうカップの珈琲を飲み干して、席を立った。

「ちょっと失礼。二杯目淹れてくるよ。颯子さんはまだいい？」

グラスには半分以上のジンジャーエールが残っている。私が頷くと、

「またいつでも中断していいからね」

と言って、山崎さんは珈琲のおかわりを注ぎに行った。

「大丈夫か、疲れてねえ？」

私が質問を受けている間に読んでいた雑誌を閉じて、陽介さんが尋ねる。

少し考えて、私は首を振った。

時間にして十二、三分の質問攻め。だけど、疲れてはいない。

「大丈夫です。製作側を見るなんて貴重です。いい経験になりますよ」

「そりゃ良かった。……今更だけど、折角の休日になんか連れ出して悪かったかもなって思ってたもんだから。俺も奢るし、山崎もそうだろうから、もう少し頼むな」

そう言って両手を合わせた陽介さんに、私は笑って頷いた。

山崎さんが戻ってきてからは、三人で販売中の月雨シリーズについての話をした。

今までの四月から七月の中でどれが好きかだとか、それぞれの印象だとか、どういう気分になるかだとか、どんな人に似合いそうかだとか。

私や陽介さんの言葉の節々を、山崎さんは手帳のページに連ねていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287y/>

BLACK D●T

2012年1月5日22時51分発行